川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和五十五年七月二十五日　印刷
昭和五十五年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻六三九号

日川協加盟

No. 639

八月号

気どったカッコウはきらいだ、
思いのままに
装うのはいいものだ、
熱い心を満たす
オーエスケージェフ

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社オーエスケー

損害保険は何でも
おまかせ下さい！

日新火災代理店

若本総合保険事務所

代表者 若本 芳彦（日新柳境所属）

TEL（0798）35−1375

階段のないとこ選ぶ老の旅

古時計まだまだ運命たどる音

ピエロを真似たばかりに匹夫めまいする

神の意に叶うと信じ票を入れ

夕餉の仕度いそいそと妻の日課

中島生々庵

銅・銀・金

6月号の本欄で、私もそろそろ一見完全そうに見えてはいるが、中古車売場にならんだ中古車のように、外見はピカピカでも、いざとなると一キロも走れるどころか、この売場からスクラップ工場へ直行されそうだ、と書いたら、あちこちの方からご親切なお見舞状を頂いた。3月に感冒で一寸寝込んだ時の弱気が、ペンの走りに現われたせいだったらしく、近頃はもとの元気に帰って5月18日の栞さんの句碑除幕には鏡びらきに続いて、中学生時代の経験を思い出して、祝い餅の一臼を搗きあげ、参会者に食べて貰ったくらいの稚気。どうぞご放念の程を。

ところで先月、紀伊国屋の田辺社長の言葉を或る誌上で拝見した。「人生を金銀銅に分けると70までは銅、70から90までが銀、90過ぎてから金である」とあった。このでんでゆくと私は現在銀の段。思い上った冷や水は厳禁にして、淀みない流れに添うて行くべきか。

川柳塔　八月号　目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

銅・銀・金……中島生々庵…（1）
八月に想う……島居白宗…（2）
誹風柳多留廿五篇研究……（三十丁）……（26）
入江　勇・清　博美・八木敬一・西原　亮・青木迷朗
紀内恒久・鈴木　黄・室山三柳・故岡田　甫
川柳塔（同人作品）……中島生々庵選…（4）
水煙抄……菊沢小松園選…（30）
柄井川柳雑記……（川柳太平記㉗）……東野大八…（23）
秀句鑑賞……（同人吟）……浜野奇童…（25）
……（水煙抄）……遠山可住…（43）
愛染帖……橘高薫風選…（40）
水府忌におもう……不二田一三夫…（28）
塔10句……菊沢小松園…（45）

八月に想う

島居白宗

〝原爆許すまじ〟毎年八月に入ると、被爆地広島・長崎に世界各国の平和運動推進者が集い、被爆死没者の慰霊と原・水爆禁止を訴える国際的式典が催されている。

昭和十六年八月一日、私は補充兵役から、出身県広島の工兵第五連隊に召集され、出征後、フィリピン、ミンダナオ島の飛行場で毎日米軍の猛空爆にさらされ、死線をさまよっていた。爆撃の恐怖にひきつづき、ジャングルでの飢餓、戦争の残酷さを思い知らされ、敗戦後は俘虜として、レイテ島に収容され米軍の使役として労務に就かされた。

広島が原爆によって跡形もなく壊滅したことを知らされ、県人としての衝撃は強烈であった。敗戦により被るであろう祖国の悲惨さを想像して、暗澹たる悲嘆のうちに疼くような望郷と焦燥に苛まれどうしであったので感慨は一入である。

幸に生還して、広島の平和公園を訪れるたびに、敗戦当時の苦悩がまざまざと甦るのである。いまや、経済的には異例の発展をとげ、他国に比較すれば一応の自由と安穏のなかにある。しかし、人間の欲望には際限がない。

第四回全日本川柳大会……橘高薫風…(39)
新同人になって……竹内紫錆…(68)
今は亡き摩天郎氏……福田丁路…(39)
人生随想……鈴木村諷子…(44)
雅号ぶっちゃけばなし……高橋夕花…(75)
初歩教室……本田恵二朗…(48)
大萬川柳「やりくり」……川村好郎選…(50)
柳界展望……(庸佑・整理)…(64)
本社七月句会……津守柳伸選…(72)
各地柳壇(佳句地10選)……里小路選…(46)
「ホームラン」……和田維久子選…(46)
一路集「夏」……久家代仕男選…(47)
「前列」……(一三夫・葉子)…(77)
編集後記……

座右の句

国会のモラルへ挑む白ペンキ　（天樹）

私の句

まごころに触れて責任追いかけず　井上喜酔

所得に対する税率、インフレ率、収入と物価との対比等は先進国の中では最も恵まれた位置にある。それでも一般的には不平不満が絶えない。私も例外なくその一人で凡欲を追うて愚痴をもらすが、〝原爆許すまじ〟とともに〝敗戦忘れまじ〟と反芻し、野望を抑制する銘として教えられるのは、

寝転べば畳一帖ふさぐのみ　路郎

である。折角の余生を楽しく価値あるものにしよう、とある動機から川柳に手をそめたのである。人間の生活に密着した万象を深く抉って、詩的に表現しようとする試みは他に優先する高尚な趣味として、一途に没頭している。が、私の誤解と独断的な放言が許されるなら『川柳キチ（狂）』と云われようとも『川柳馬鹿』であってはならないと思う。世間とは没交渉で十七音字を器用に組立てることのみをもって全てとし、他をかえりみないのは学者馬鹿、役者馬鹿は通用するとしても川柳の道ではどうかと思う。

古くとも僕には仁義礼智信　路郎

師の名句を念頭に刻んで、勝って奢らず、負けて挫けず、けれど敗れたときの苦悩は忘れず、明日へ伸びる試練として自戒し、不偏的に社会に通用する常識を養い、余裕ある余生を送りたいと希っている。

敗戦記また繰り返す夏の雲　白宗

中島生々庵選

下駄履きの余生のひびき乱れない
傷口をおさえ男を自覚する
骨しゃぶる成程鯛と申し上げ
墨色に笹の葉ずれのときめきぬ
駈け足で涙を溜めた別れ道

倉敷市　水粉千翁

止り木がないと眠れぬ鳥になり
むなしさは隣まで来た郵便屋
自分に丸つけて心休ませる
造反をしない一票僕にある
魚家へ嫁ぎ魚屋の声になり

尼崎市　黒川紫香

今生きている喜びの深呼吸
いのち縮めるように時計をふり返り
ガム噛んできれいな嘘をととのえる

大阪市　中川滋雀

ふる里の近さが義理をまた背負い
しがみつく添え木はないが蔓はのび

八尾市　香川酔々

サラリーマンいつも首には鈴をつけ
小説が書けず折鶴折っている
ロボットのように手品の助手になる
筋書きで動く男の恥である
呆気なく女のはまる嘘の罠

島根県　小砂白汀

もう一度立てと給わる千羽鶴
芳しいかおり病が癒えはじめ
焼芋屋やきいも臭うおつり出し
居直って生きるお寺が駐車場
この時とばかり酒癖さらけ出し

守口市　野呂右近

咲きほこる花にも寒暑に堪えた過去

肩に力入れたり抜いたり日々を追う
消してある一字あれこれ察し読み
狼を羊に変える停年制
土臭い歌が地酒に溶ける宵

兵庫県　遠山可住

二人きりになり冗談がもう言えず
悠然と五分遅れて寺の鐘
お見事な色を褒めたら造花です
さわやかな青葉へ太陽も早起きし
防波堤ここから海は母になる

倉敷市　野田素身郎

冗談もうかつに言えぬ地位になり
あとは明日にしようよネオンが呼んでいる
ちり紙交換できるほど選挙ビラをくれ
給料前有り金出しあう共稼ぎ
髪染める別に出かけるあてはない

倉敷市　小幡里風

いい事がありそう妻の淡化粧
如意棒が欲しいと思う日が続く
正座して聞く冗談は笑えない
直線を翔んでツバメの里帰り
清水の舞台のぞいて独り言

藤井寺市　吉岡美房

平和ぼけ五輪の旗を振りつづけ
政治家が信じられない不信任
悪いのは政府みんなよい子になりたがり
結論の出ぬ立て前のスローガン
政権の為なら節のない選挙

富田林市　岩田美代

貯めといた言葉がすでに湿ってる
女が肥えて男が痩せて長い梅雨
いちごつぶして五月の終りを葬りぬ
沈黙の夫婦にキッチンの今日終る
墓洗うて私の罪は消しておく

呉市　槇田英詩

ペン軽く僕のこころを弾き出す
善人へ隠しカメラが欠伸する
幻かも泡かも掴みきれぬ虹
潔よく敗れ勝者と握手する
足音は夫のものでない欠伸

倉敷市　稲田豊作

謹厳な父に呆れた隠し芸
千日手と知らずに無駄な汗流し
共稼ぎ夫婦に匂う青畳
落ちそうな仮面の客に苦笑する
又小競合いかと日輪笑いだす

岸和田市　高橋操子

そら豆の皮黒くなり春惜しむ
むし暑さケケケケ蛙雨を告ぐ
時計見る人で話も落ちつけず

盆栽の世話を日課によい老後
叱られてから先生が好きになり
川西市　戸田古方

割り切れんままで大方暮れかかり
巫女楚々と金婚となる五月の陽
わりごそば二杯目まではためらわず
写真とったら団体さっさと引揚げる
止り木のそこから見えるコンコース
岡山県　嘉数千代香

陽が昇る今日を約束するように
敗けて勝つおんなの独楽のななころび
純白の絹糸にさえあるもつれ
忘れたいことにつまずく白い足袋
その風に任す風車になって老い
島根県　栂みどり

衣がえ朝の鏡へポーズとる
梅つけて女の四季を一つ終え
庭すみへ開いた心の友の花
ほととぎす鳴けば無性に亡夫恋し
傘一つ肩よせ合うたランドセル
米子市　林瑞枝

五月三十一日姑逝く
釈迦も座す句座で話題の尽きぬまま
菜を刻む涙で御詠歌途切れ勝ち
バックボーン柳誌に燃した姑の筆
スムースにリズムを戻して来た暮らし
病む床へ明日は涼風呼ぶ雨か
竹原市　森井菁居

世渡りの死角で甘い汁を吸い
テープ切る感動札束では買えぬ
哀しさをかくす絵具の彩がない
善人の胃は敏感に世を憂い
せめて夜の演出する形容詞
松江市　小林孤呂二

方程式どおりの男で酌ぎにくい
力瘤やわらかくなり老い兆す
妻と娘の睦まじき仲へ割り込まず
快刀乱麻を断つ日のよく眠れ
所詮はひとり他人に飲ます酒は無い
大阪市　金井文秋

ケタケタ笑うから立読み追い出され
よかったら買う気大方読んじまい
老人の会話がいつか死に触れる
明日からやる禁煙が日延べされ
売れ残り独身で行く主義に変え
宝塚市　傍島静馬

狭心症うっかり奴鳴った息づかい
老友の訃報相次ぐこぜわしさ
名匠も子供に学ぶときがあり
アイメークわたしの素顔どこへいた

今日生きる仕事にリハーサルはない
東大阪市　市場没食子

廃品回収いいえ選挙の宣伝カー
御見逸れをしたはあなたが余り痩せ
草石先生を想う（三句）
川柳が肌にピッタシ御曹子
宴で出た三高の寮歌聞き覚え
右分けの髪も先生を真似た僕
和歌山市　津田与史

心斎橋ため息ついて通り越し
石仏の物云いたげな目から逃げ
ため息が挨拶となる物価高
憧れたぶらりのなんと退屈な
第三の人生生かす筆を買う
八尾市　高橋夕花

ひと粒ずつ祈りの中で梅漬ける
母と子で渡れぬ橋が見えてくる
睡眠不足鏡の中も雨季に入る
もう少し女でいたい日傘撰る
土砂降りに水の炎を見てしまう
島根県　川崎秋女

村八分そんな気がする朝を出る
憎しみは持たぬが哀しみ炎えている
山の青野の青海も青と炎え
青紫蘇の青が生きてる冷奴
憎しみの炎は消火栓では消えぬ
和歌山市　内芝としよ

五月雨の菖蒲へ濡れたいふたり行く
今日のため作った晴着雨に泣く
何でもない一言こんなに嬉しくて
楚々と咲く紫陽花連呼を何と聞く
おどけてる父はやりくり胸に秘め
岸和田市　福浦勝晴

西尾栞先生句碑建立
いしぶみに波打つ生きている詩魂
さりげなく明日を視つめるわが家の灯
詩情なき選挙に煙る雨の街
志士の碑に酒を手向ける独り旅
日日平和軍隊手帳ひからびる
今治市　月原宵明

鉛筆の徒ら書きが本音かく
収入を鼻で笑って嫁き遅れ
置き酌ぎの父に淋しい翳があり
喝采をあなたへ送る月給日
職の無い五体満足天仰ぐ
大阪市　本間満津子

口下手な息子の優しい目を信じ
小出しして守る老後のエネルギー
過疎の村お神楽だんだん重くなり
純刀を研いでなんでも斬りたがり

手の切れる札で人間料理され

東大阪市　萩尾真佐志

停年の今夜は妻と酔うつもり
お若いとマダム営業用の声
漬け方は本に習うて核家族
頑固ではない信念で云う言葉
まだ十九ですと縁談追い帰し

島根県　木村はじめ

顔見れば直ぐ泣く病人見舞かね
春風に紅い造花も散りたかろ
活け終えて心しずかに端座する
お互いに見ぬふりをしてすれ違い
覚悟まだ出来ないままに古稀を過ぎ

神戸市　仲どんたく

先越された斟と更ける宿の夜
渡月橋墨絵となりし傘の人
勝力士スキンシップで見送られ
父の愛口では言わぬ父の愛
胎動へ毛糸いそいそ減ってゆき

八尾市　高杉鬼遊

香奠を数える指が愉しそう
披露宴めでたいことは退屈だ
笑わせる芸で場末の酒に酔い
恋の字もうす汚なさの歳となり
黒靴を買う慶びを待っている

白杖の陽が沈む頃音に飽き
あの音も想い出すまま旅話
句碑建立しかと両手に見きわめて
大の字に眠るしあわせ妻よ子よ
昔はよかった雨の音まで好きだった

島根県　堀江正朗

貧しさに馴れて冗談うまくなり
すぐ治りますと女医さん声で追い
水枕笑わなかった日の長さ
あきらめの底から欲が首を上げ
理想の妻でないから気兼ねなく暮らす

大阪市　川口弘生

褒め言葉きれいなシルバーグレイです
生き甲斐に孫の結婚式を待つ
衣食住足らねば優しさなど要らぬ
俺よりも弱そうだから吠えてみる
食うだけはあり負け犬に甘んじる

大阪市　神夏磯道子

せせらぎへ乗った笹舟海知らず
梅雨馴れの目を呼び戻す花菖蒲
豆ごはん今日の出来ごと触れずおく
押し花の強い力へ素直なり
景色みるゆとりが出来た下り坂

柳井市　弘津柳慶

病弱な妻の言葉にとげがある
隠居などさせず世話役頼まれる
アルバムへ父は明治の色であり
雨の舗道青年へ老人道を開け
雛段は里へ預けたまんまなり

笠岡市　松本忠三

ポックリと死にたいなんて贅沢な
うたた寝を蠅一匹になめられる
図太さは最前列で居眠りし
偏屈と笑われようが白は白
告白へ何も聞かないことにする

大阪市　小出智子

梅雨の雲ずしりとわたしを離さない
人の世のならわしを承け梅漬ける
カーテンを変えたぐらいで気が晴れる
病む母へ寝苦しい夜の胸さわぎ
しとしとと降る夜は母のかなしみか

米子市　小西雄々

札束に傾く気配みせぬ意地
島の娘をまたも泣かせる霧笛鳴る
母性愛に似た愛情にくすぐられ
美しい出会いも期待して赴任
四捨五入される余りの中におり

倉敷市　田垣方大

スクラップとは気付かない定退日
肩書のない父人間味がにじみ
強がりの姿勢は拳ふるえてる
スチュワーデス優しい顔の消えるスト

藤井寺市　児島与呂志

まだ老いの坂を登れと道標
掃除する間を妻に追い出され
妻の目にふれれば男の馬鹿な夢
なけなしをはたいて男の意地を立て
ためされているとも知らずまだ喋り

今治市　長野文庫

易者にもお世辞福耳だと言われ
ボスにぶら下がり上手に世を泳ぎ
覚悟しておけと言うよう訃報聞く
金歯取り上げてあの世へ旅立たせ
揮毫には和と書く人が牙をむき

大阪市　本多柳志

折込みのバーゲン妻のスケジュール
親の夢徐々にぐらつく通知表
まだ生きて居はったらしい叙勲記事
そこまでの後姿を見送られ
ポスターは国を憂うる顔でなし

和歌山市　西山幸

アドリブも脚本も呑む波に逢う
あじさいの彩虚と実に疲れきり

想い出に酔うて酔えない生ビール
あきらめの深さ眉間に溜めている
マンネリの暮らしを見てる古時計
富田林市　板尾岳人

河童橋穂高連峰見て眠る
母と云う文字を見つけた山の峰
父と行く山へ梅干持ってゆく
槍・穂高真夏の雪は冬である
山に来て母の土産は山の石
大阪市　大坂形水

金権へ天候までが味方する
なにわぶしに負けてしまったイデオロギー
省エネルックそんなの老舗扱わぬ
省エネに売り場食われるオリジナル
季節外れのままに挿されている造花
大阪市　不二田一三夫

三味線夫婦も車庫に帰るなり
稿料がないから没にされず載り
ネクタイを置いて電車賃を借り
服・ズボン10キロ痩せたままでいる
糖尿の本ばかり読む日がつづき
東京都　大山と金

貧乏に定年が無い職さがし
信念と努力があって運がない
金かけて化物となるアイシャドウ
話合ううちに本音が少しずつ
高槻市　若柳潮花

旅の湯の浴衣をぬける山の風
常盤津の糸が泣かせる靱猿
怪物のようにお若う見てとられ
名刹で貰ろた戒名もって生き
堺市　高橋千万子

しわよせを自分がかぶり夜の酒
風船にきのうの息がまだ残る
もの分りよいとほめられ損をする
向き合えば何時も私の目が負ける
倉敷市　藤井春日

さりげなく出されるお茶にも心知る
我儘を許され合うて家族です
汐時と言うもののあり職を辞す
二度ともう会うことのない握手です
桜井市　岩本雀踊子

とても暑いといらだちを持つ無職
はみ出した男が抱いてる導火線
本人はとても真面目な欲呆けで
何も云わぬが赦した背を父が持つ
出雲市　原独仙

楽天家あれで数奇な運命もち
牛の尾は眠っていても蠅を追う
遅参した奴が句想の座を乱し

ピカソの絵見ているような革新句
富田林市　和田維久子

此の道より往く道はなし迷いなし
果せない夢孫にかけ毛糸編む
石橋をたたいて悔いる橋もある
下書きのない人生の舞を舞う
青森市　工藤甲吉

センセイは山をも移す口をもち
老い二人老い一人から羨まれ
浄土から見ていてくれという自信
こんないい国は無いぞと酔うて寝る
大田市　藤田軒太楼

ネジ巻かぬ時計を持っている惰性
ゆっくりとする気を嫁が追いたてる
腕力の強さをかりて居るだけさ
新緑に歩巾を延ばすジョギング
貝塚市　行天千代

亡き友よ今どのあたり一人旅
どこまでも空の青さよ気も晴れる
亡き亡夫を想い出させる夕あかね
影法師まだ私に有る安堵
島根県　西村早苗

煙草の輪風に気付いた乱れよう
指先をなめて姑と味のこと
返事待つ心をのぞくものは風
掌のぬくみ残してサヨナラとは憎い
大阪市　欄蘭

八方美人他人には裏の方は見せず
晩年へ一日ずつを大事にし
掃除機へ音痴の歌も混ってる
お茶一杯よばれてからの長っ尻
竹原市　時広一路

檻に馴れ人間に馴れ無表情
そろばんをはじくと愛が消えそうな
野の花と話が出来た回り道
雨なんぞ要らぬと言えば叱られる
西宮市　藤村〆女

妬心静かにグラスの底に沈ませる
相合傘の歩巾へ雨が妬いている
忘却のコマを廻している女
裏切ってみようか花を買いました
鳥取市　河村日満

温泉呆け酒呆け列車も停車駅忘れ
冷房の効きすぎ風邪を背負って降り
こうるさい波が円月島に散り
勝浦も早発ち朝湯気もなし
岡山市　川端柳子

大切な記憶ひとりで反芻し
シャッターチャンスいま花婿の目に涙
「オイ」という名前があって忙しい

御縁うすき人なり今日もすれちがい
大阪市　江城修史

保護色に染まることなき子の歩み
一と時のやすらぎ夫婦で子を語る
走馬灯暗い灯影に縫う亡母よ
はるかなる虹へとどかぬ積木つむ
奈良市　森田カズエ

誠意だけ頂戴しますのし袋
マイホームローンへミシン踏みつづけ
野性的とみられて涙すぐに出る
灯を下げて句帳を埋める老いたのし
松原市　谷垣史好

十姉妹今朝も生きてる雛三羽
反抗期やかんの蓋が煮えたぎる
がり版刷りが似合う貧しき半生記
島国で夢も悪事もちっぽけな
岡山県　岩道博友

異論吐く喉から強壮剤臭い
見栄を張り引き際知らず墓穴掘る
目的を語らず愚痴にしてしまい
回数券まとめて買って期限切れ
出雲市　板垣夢酔

干されてる梅満天の星を恋う
謝れば済むことなのに腹が立つ
告白の愛が迷惑がられてる
枯れはせぬけれど造花に恋はない
鳥取県　鈴木村諷子

哀しさも深刻過ぎて笑っちゃい
花嫁の馬のあの得意そうな顔
人間が嫌いになって田水引く
伸びるよう伸び過ぎぬよう水をかけ
鳥取市　両川洋々

偽善者のポケットきれいな嘘を詰め
ポケットの小銭が無職の俺を責め
自面像へ私の汚点など書かぬ
厚化粧へ悪女の相を封じ込め
奈良県　村上春巳

仁王さんバイバイしっかり頼みます
どう見ても良い番号の宝くじ
太陽がこうも楽しい梅雨晴間
コッケイな世辞も祝辞なら聞ける
奈良県　上田翠光

明日があるから今日を生きている
身にまとう刺はあざみの身だしなみ
大平首相急逝
鈍牛にあらず見事な散華ぶり
敵味方アッと云わせた総理の死
松江市　柳楽鶴丸

合図は何もない妻と僕
手袋の中は黒い手かも知れぬ

小憎らしいと思った女が好きになり
極楽は全党連立かも知れぬ

和歌山市　垂井千寿子

法話聞く一時だけのゆとりとも
三代の同居にすんなり入る努力
病院へ今日は見舞としての顔
夏風邪がキャンセルさせた山の夢

鳥取市　小林由多香

吉報を伝える息がととのわず
意地だけで勝てない技の背負い投げ
難題は次回へ置いて酒とする
達筆でなくとも読める字が欲しい

大阪市　河井庸佑

出る杭は打たれるものと知って出る
つい口がすべりましたで済まぬ椅子
肚決めてかかれば逆に回り出し
外野から言いたいことを言うて生き

松江市　竹内寿美

収賄で出来た庭園見て通る
柳友の訃を聞く春の風の中
言い訳に空咳一つ二つ三つ
思う人あたため春の日が長い

香川県　三井酔夢

薫風氏東洋樹賞受賞
片隅で拍手している五月晴れ

岳人夫妻と鶴橋にて
ムンムンとする焼き肉とむつまじさ

東野大八氏を訪う
これは蒲公英これは山椒飲みながら
ほんものの夫婦みて来た置ごたつ

鳥取県　金川満春

時折は見せておきたい老の意地
候文書いて見たくも御座候
高齢者マラソン明治の意地をみせ
誠実が頭の回転カバーする

大阪市　黒田真砂

夢抱いて登り切る気の女坂
或る時の女が抱く不発弾
翔べば案じおとなしければ又案じ
過去みんな捨てて女の稼ぐ城

鳥取県　林露杖

青刈りをする減反の田を植える
紙を漉く技に応える水の性
天敵の如く行事を阻む奴
俗縁の涯一塊の骨拾う

大阪市　河野君子

萎ませてはならぬ明治の智恵袋
嫁がきて父の日俄に浮き上り
預金して利子の先まで読む老女
ふり向けば足跡を消す風に逢う

大阪市　神谷凡九郎

決して決して君の罪ではないよネ鏡
造作を変えたお顔へ易者の灯
何の取得あってか今日までを生きて来た
失敗しかないから過去がなつかしい

和歌山市　野村太茂津

極楽は今だと思う蛍舞う
末世の非鳴に狎れる怖しさ
豪邸を継いで小心増すばかり
まざまざと愚かな影にしがみつき

下関市　国弘半休門

悪水のよどみへ大雨注意報
おにぎりが海苔のたすきで立候補
日旺の計画選挙の日でつどい
生長の夢あり孫子も花菖蒲

京都市　都倉求芽

山幾重それぞれ自慢の日の出持ち
働き蜂の巣箱が走る通勤車
強いられた妥協へ靴ベラが滑らない
あちこちの家計簿のぞいてきたお紙幣

大阪市　西川善紫

欲でない親身と口で云うものの
死ぬまでに治しおきたい金欠病
男坂古稀でも疲れまだ見せず
お先にどうぞ冥土へのみちあける

呉市　林野甦光

上役の目が温かい国訛り
銀行の裏から這入る手形の日
金策に行ってもポケットベルが呼び
行届く世辞へ女の目が迷い

宇部市　平田実男

酒飲んでいいと言われて名医にし
奉賀帳右へならえをせぬ勇気
父交通事故に会う
加害者の涙へ父の無表情
意識回復病室へ笑みがさし

東大阪市　竹中綾珠（あやじゅ）（綾女改め）

冷房機ないが涼しい奥座敷
父の日は家族で食事に行くと決め
残された者の悲しさ知り過ぎる
最後の一本ゆっくり吸って灰皿へ

平田市　久家代仕男

見栄すてた人の素顔の美しい
家系図からはみ出しそうな子がひとり
俗人のいのち縮める億の金
添加物鮎もはまちも危のうて

島根県　藤井明朗

城守るおんなひとりに隙がある
もやい舟別れをのせて霧に消え
筆ほめてわからぬままの書道展

極楽の顔を迎える善光寺

京都府　間嶋青丹子

涙もろさを勘定に入れて電話する
独り立ちすれば他人の顔になり
禁酒したおやじの淋しそうな肩
停年へまだ商人になり切れず

枚方市　水野弘

物価高忘れて今日は糸を垂れ
転勤を仄めかされた四月馬鹿
夏雲に乗ってゆきたい失意の日
やりくりを済ませて今日は句座に居る

大阪市　天正千梢

親の翼で飛んで帰り道忘れ
黄色い口ばしに獲物大きすぎ
曖昧な記憶けんかの種になり
聖書めくって母の姿勢たしかめる

大阪市　北勝美

梅雨晴れ間照るてる坊主に義理をたて
水滴の落ちる光へ小半時
掃除夫のズボンに折目ついており
茶柱がはずみをつけた今朝の靴

寝屋川市　宮尾あいき

あじさいが雨をよんでるこびている
スナップのバックの菜の花ばかり賞め
病んでる間に鉢のさつきが花をつけ
蝶々が私の花にも来てとまり

竹原市　山内静水

一歩いずれば売娘笑顔などしない
ウォーターではない水筒に満す水
弁当の謀反は目指す昼寝寺
夫婦相い和して六十髪染めて

出雲市　高橋可保留

お喋りの佳境は箸を持ったまま
同居から愚痴ふんだんに聞く別居
自転車の口笛何にも釣って来ず
やりくりが行きつ戻りつ市場竜

米子市　八木千代

失言の悔いにまひるの歯を磨く
貝閉じて海の広さに目もくれぬ
泣き虫がついてもはずむ手毬うた
子燕の育ちにふれる風のうた

岸和田市　古野ひで

長雨に心も濡れて人を恋い
拭き込んだ柱の艶に亡母います
身に過ぎた倖だからこわくなり
秋待てぬ蟋蟀そっと埋めてやり

姫路市　大原葉香

一日のノルマは靴に聞いてくれ
ビジネスで下げる頭が癖となり
人相をじっくり見届け吠え始め

戦争は嫌に軍歌よくうたい

島根県　錦織文子

逢えばすぐ血圧のことなどに触れ
そこからは妥協の出来ぬとこに佇ち
思い出が時には炎える彩になり
こんな世相へも美しい四季があり

岡山市　時末一灯

あてにせぬ指切りだから大仰に
企みの指じんわりと絡ませる
産み疲れ鶏舎無口になって夜
女には心のひき出しいくつある

京部市　松川杜的

横山大観展に詠む（一句）

漁村返照漁夫の語らい聞えそう
粗品のつかぬアンケートでほっとかれ
肩書の無い名刺でよしつつがなし
割り切ってしまえば楽し宮仕え

米子市　石垣花子

長いのに巻かれ停年までつとめ
算術の答えは阿呆に成れと出る
一人住む老婆軍歌へ目をぬらし
二浪の子枯野抜け出す日へ必死

仙台市　川村映輝

老人をホームへ送り福祉という
七色の薬持参で旅に出る

家庭不和聞かされ夫婦仲なおり
収入にあわせて暮らす老夫婦

大阪市　室谷徹舟

満開のつつじに負けぬ衣替え
もう歳か娘に負ける中ジョッキ
若干の落度あります凡夫です
ぜいたくは夫が難産する時世

岸和田市　島崎冨志子

やるだけはやった心に残るきず
親の引いたレールを惜しみなく曲げる
自惚れた心に人の声入らず
スランプへ努力足らぬと自覚する

和泉市　西岡洛酔

諸行無常唱える間も無し吐血する
救急車人事でない今日主役
天国をノックしただけ逃げ帰り
生き伸びた命へ注射針痛く

倉吉市　奥谷弘朗

信じ切る妻の笑顔に励まされ
意欲満々いと快適に踏むペタル
意地のない男相槌ばかり打ち
改革へしきたり厚い壁となる

岡山市　井上柳五郎

一票とチリ紙交換声競う
留守勝ちの家美しいバラ咲かせ

覚悟せよから小康にまたあわて
葬送へ遠路来たぞの義理の顔
松江市　梅本登美也

万引も隅に乗せてるエレベーター
真ん中へ母の手をひく祝膳
減反へ役所勤めの養子くる
二三本くべて隣を風呂に呼び
東大阪市　崎山美子

紫陽花は本心みせぬまましおれ
独立をして独立のつらさ知る
親友の裏表みたコップ酒
陣容一新まっ先に肩たたかれる
京都市　山本規不風

計算になかった独楽の芯の錆
白旗を振るとは読みが浅かった
憎らしい妻の笑顔が遠くいる
あした云う娘の答えを待ってやる
八尾市　宮西弥生

戦いが好きでひとりになり切れず
経済面読んですこしけちになり
ああ中年これよりカメラ近づけぬ
茶柱の今日に賭けてる飽えがある
諫早市　原田明春

叩かれて初めて知った夫婦愛
ビルが建ちうちの大空せまくなり
女房は札で俺は小銭で飼育され
集会へ顔々かおの選挙前
大阪市　柳原静香

手をつなぐ夫婦を笑う青葉風
お隣りまで掃いて老いの気が和み
未来図を描けば墓地にゆきあたり
心臓をなだめて登る墓の道
和歌山市　若宮武雄

角とれただけ人間もちいそなり
父の日の父を大きくした和服
妻の風邪何か報いてやりたいが
とてもええお医者さんです快復期
堺市　藤井一二三

八面六臂肩書きも変え小企業
子を産まぬ候補ミルクのことも触れ
大平総理急逝
雄図空し無念の一語抱いて逝く
大阪市　西森花村

小鳥屋をちょっと覗いて焼き鳥屋
曲り道ないのも淋し高速路
真実と迷いと相合傘の中
西宮市　島居白宗

新築の楽屋を覗く近所の目
黄と赤だけの信号古稀の道
金運を思い知らさる株相場

木枯しをまだ意識せず若葉燃え　鳥取県　清水一保

嘘だとは云わさぬきれいな目に圧され

目的があるから花は散る日まで　橿原市　岩井本蔭棒

口欠けた土器が収まる桐の箱

地球儀のこの一点に僕が居る

改札に風を残して走り抜け　大阪市　津守柳伸

喝采は棺に揚がる狼煙かも

遠来の友入り乱れ選挙どき

甘えだけ目立つ原点見付け出し　兵庫県　藤後実男

グループの一人が消えた酒の味

山椒の葉母が叩いて朝の汁

湯と水が出て洗面の母が老い　東大阪市　斎藤三十四

四、五本の髪で櫛を離さない

阿呆役になりきると云うも欲

裏表知りつくして窓際族となる　大阪市　神田秀峰

世の中の矛盾へ投書の直訴する

宴会へ日頃のうさをぶちまける

話の座電話のベルが途切れさせ　岡山県　出原敬一

重荷負う妻ひとときを花と居る

行商の男ざかりを低う来る

絵日記の母亡き子の瞳にすくわれる　羽咋市　三宅ろ亭

大雨を忘れたような空の蒼

土百姓それでよいのに腹を立て

子育てが終ればあなたのリードです　米子市　佐伯越子

ささやかな日銭は汗を吸って貯め

花濡れて春の名残りの城下町

真実の鈴を鳴らして子と遍路　兵庫県　辻文平

指で書く絵が文字になる片思い

朱い実へ小鳥は明日を思わない

ほおずきで娘の頃に帰る妻　大阪市　横地雅風

餌をもらう手前の声で吠えておく

二人世帯それでも安い盛りを買う

怒ってもいつしか妻の肩を揉み　鳥取市　有田とし江

釣り糸を垂れて故郷の雨に濡れ

若さには勝てぬ人生の悲哀みた

歯を抜いてうれしい話がこぼれそう　島根県　大野酔夢

アルバムの過去をみつめる煙草の輪

産声と挽歌の距離をつなぐ道
風化した顔にも年金通知来る
寝屋川市　江口　度

てるてる坊主と念力競う雨蛙
老妻の少うし間のびのした振子
ちらしの上に妻の目玉が落ちていた
奈良市　宮口笛生

晴耕雨読雨雨と続く日よ
退職のゆとり血圧上り出し
捨てられず子猫七匹とも育ち
美祢市　安平次弘道

妻がネジ巻くから会社休めない
自画像のゆがみに見せる挫折感
弱者にも保護色と云う自衛論
今治市　越智一水

落ちつけとさとしてくれる庭の石
お隣の墓にも花をさしてあげ
腹の虫おさめる場所は妻だった
玉野市　小谷仙山

麦飯がほしいと贅沢言っている
逃げ道を明けてじっくり攻められる
何事も無かった今日の風呂加減
大阪市　藤田頂留子

流れても堂々巡りの地下の川
コンビもう並んだだけで来る笑い
流行も地球と一緒に一とめぐり
大阪市　那須鎮彦

妻が男ならゾッとするライバル
それなりにつくろう妻の強さかな
水をくむ妻にすこうし力こぶ
松江市　恒松叮紅

退職をしても上司の癖が出る
新築の釘一本を拒む艶
あらそえぬ血筋に高所恐怖症
新宮市　大矢十郎

後添が少うし抜けていて平和
相槌をうって心は金のこと
惚れたのはどっちでも良いいい夫婦
和歌山市　福本英子

ゼロ一つ確める眼鏡かけなおす
新緑も青空もある車椅子
傷口をさけて見舞いの友が去に
岸和田市　狭間希久志

法話説く禅師に過去を叱られる
石橋を渡る一歩に迷う老い
旅人の心覗ける木賃宿
和歌山市　坂口公子

暗闇でぐさっと吐き出された本音
青い実へ生殺与奪の行使権
ボロボロの亡母の手紙にある未練

保護色の蛙に虫がぱくられる
迎え火を信じて児らも掌を合せ
発車ベル友が投げ込むワンカップ

鳥取県　森田布堂

赤飯でヒッソリ祝った娘の異状
ライバルが一番に来て祝い酒
Gパンで野立で正座させられる

姫路市　植村客遊子

摘心の花芽に罪はないものを
旧友の電話も狙いは票頼み
こんな人ばかりじゃないと立ち直り

福山市　桑田静子

波瀾万丈だったは老いて飾る過去
年金をもらう庶民の背番号
学園駅砂時計めく群進む

町田市　竹内紫錆

濡れタオルじっと載せてる二日酔
新築の我が家裏では四苦八苦
いや応なし二次会車へ押し込まれ

河内長野市　井上喜酔

五線紙にのこし度いよな漏りの音
青刈田肥をやらずに居られよか
入山料有無を云わさぬ仁王の眼

兵庫県　河原みのる

竹原市　小島蘭幸

父のつなわたりを見つめたりしない
燃えている男いい顔してるなり
一才に鈴つけておく妻の知恵

島根県　太田亀甲

小説にしたらと話す俺の過去
お達者でいいねと云われる年になり
お爺さんの入歯があった洗面所

鳥取市　岸本無人

いざと云う時の白旗かくし持つ
敵味方図太い奴とほめられる
お互に慣らされ合って友白髪

和歌山市　浦野和子

廻れ右してやっぱり逢いに行く
わだかまり捨ててシグナル青になる
青写真日当りのよい母の部屋

倉敷市　斎藤通風

この先は南極なるか水平線
豪州へ夏から冬へと十時間
外国機日本語並べ書いてある

神戸市　山口美穂

アマリリスの赤へ思わず語りかけ
せせらぎが哀歌をうたう旅の宿
にぎり飯ほおばる若さ陽が眩し

藤井寺市　中原比呂志

潔ぎよく負けて祝電うてる仲

ふる里の山彦たしか湧く勇気
汗臭く男天下の夏を寝る
和歌山市　松原寿子

どなたにも優しい貴方を縛れない
約束の小指に通う血の温み
散るための涙寝返り打ってから
唐津市　新岡回天子

野草一輪玄関に生けて奥床し
選挙さえ通れば俺の自由意志
清澄な池へヤンマは腰をすえ
岸和田市　清野こう

叱られた思い出も有り恩師の訃
孫の世話なくなり吾身もてあまし
蝶々も蜂も忙がし梅雨晴間
三重県　坪田冬花

父の日に母子で決るアデランス
蔽蛇をつついて出して逃げ切れず
父の唄母もつられて子と唄い
岸和田市　原さよ子

慌て者いつも漫画をこしらえる
世話好きは体も口もよく動き
お天気もお客のせいにガイドさん
松原市　北野久子

ホノルル市　前山北海

国防おんぶ経済大国へのし上り
サラリーをウイークペイかと孫が聞き
声かける人も無き我が落ち目知り
東大阪市　奥山弥山人

平安の朱殿も浮かぶ薪能
孫に手を挙げさせられる青信号
人間の弱点をつく手品みる
岡山県　直原七面山

古稀の背に母を負い
見えぬ目に涙溜め
飲め飲めは策があり
岡山市　花田たけ志

愛の芽を無慈悲にむしる世間体
親馬鹿に先祖と世間が無理をさせ
気兼ねする次元が違う嫁姑
青森県　五十嵐操史

アクセルを静かに踏んでデートする
好運の舞い込む予感へ気が軽い
考えてみなはれ含みのある言葉
加賀市　細呂木魯木

悪口は聞くだけ聞いとく吾が雅量
梅雨に入り社内で特訓バスガイド
若者のロックに老愁しみじみと
新調の靴も梅雨あけ待っている
若本多久志

喜寿過ぎてまだ青い鳥追いつづけ
一期一会いつも最後の旅に出る
洋服がみなダブダブになる哀感

かたつむりの角なら僕も恐くない
この家の古さに柱なでてみる
挑戦かも知れぬ大きな伸びをする
どん底にいる長身が似合わない
しっぺ返し怖くて男荒れている

一坪の庭に鎮まる道祖神
願望の夢が叶うた道祖神
佐度おけさ肌まで染みる道祖神
朝夕の庭を彩る道祖神
合掌の爺に温まる喜の賀寿

とも角も平均寿命までは生き
低声で訃報を言うてくる電話
苦労しただけで世話好き放っとかれ
逃げるだけ逃げてもお天道様が追い
褌の字がよごれてるように見え

露天湯の裸像絵にして夕映える
コツコツと心の塔を補強する
寄せ書の顔顔顔がよく喋る
御神符も添えた土産の温かさ

正本水客

伊藤茶仏

浜田久米雄

本田恵二朗

清流とはこれぞと思う五十鈴川

銀行は強盗さんにも気前よし
降り続き夫婦喧嘩も間のびする
背の丸いのが一列にヌード館
筍が皮二、三枚脱ぐ対話
赤い衣の女にわらび列を成し

吹く風によって左にもなる議員
冗談のつもりが急所突いていた
夫婦ではないらし二人よう喋り
今日のこと今日で忘れる気のつもり
夕食の箸の重さを妻知らず

かたくなに句をつくらねば喪のごとし
この花にあのような実が四月馬鹿
選挙をば戦と呼ぶは平和かな
黒百合を見てこの旅はこれでよし
雲の峰さあこれからだこれからだ

真珠抱いてから憶病なあこや貝
補助椅子のままで一生終るのか
食うための社歌唄うとは思うまい
名作か駄作か紙魚の知らぬこと
一線を越す覚悟はすでに出来ている

尼緑之助

川村好郎

橘高薫風

菊沢小松園

西尾栞氏の句はP76に発表

川柳太平記 (27)

柄井川柳雑記

東野大八

初代川柳、すなわち無名庵柄井川柳が活躍していたころの宝暦末年から明和、安永、天明期にかけては、江戸に名ある雑俳の点者は二十余名を数えていた。しかしその選択眼や人柄においては彼が一等頭角を抜いていた。

この人気に比例して年十三回実施される万句合興行は、平均年二万句を下らなかったから、入花料十六文（約百円）とみて年収ざっと今の金で六百万円。それに十指に余る雑俳出版物の選句料、印税も相当なものがあったろうし、加えて彼は名主職である。年間百五十両の定給に、名主職の利権行使の余徳の数々は、ゆうにそれを上回っていただろう。

こうみると当節、毎年五月に発表される全国高額者所得者番付（国税局担当）のいわゆる長者番付には、全国ベストテンのいいところに顔をみせていたことは疑いない。

こういう一大分限者の長者名主には、当然各階層の指導者や人材が黙ってでもついてくる。可有・花久・菅江らに賛助点者十余人を中心とする柄井川柳ブレーンは自ずと結成されていった。勿論彼自身の人徳もあったろうが、ことが人情の機微も人肌濃い川柳だけに身幅の広大な江戸庶民の、大衆という基盤の支持もその底辺にある。彼を悪者にしようにも第一その取巻きが承知しないだろう。川叟なる敬称で晩年まで、揺ぎないその優雅な環境を満喫したことは十分推察できる。一個人の川柳なる表徳（柳号）が、後世二百年の果てまで、一文芸の代名詞として世に残る所以もまたここにあったとみるのは筆者だけではあるまい。

初代川柳の点者生活の中で最もエキサイトしたのは、三笠付賭博禁令と、享保七年に出た「将軍祖宗の事蹟を初め施政に関するもの一切停禁」の、いわば当局批判の風刺厳禁と艶本類の禁令が生きていたことであった。

初代川柳在世の頃は、田沼意次時代の賄賂政治の腐敗をはじめ、山県大弐の明和事件、久留米方面の一大一揆、米価の暴騰、御用金の改鋳、天災地変の数々に米穀産地の不作飢饉等上も下も予期せぬ試錬にさらされ、落書、落首、狂歌等バレ句川柳の一大氾濫期であった。それだけに初代川柳はじめ雑俳の世界もこの種禁令に大変な神経を使った。

—役人の子はにぎにぎをよく覚え（樽初）
—役人の骨っぽいのは猪牙に乗せ（〃）

柳多留三篇の遅刊はこれが原因とされ

—さまざまに扇をつかう奉行職（樽3）

も相当物議をかもした上

—高枕これも日光細工なり（樽4）

で柄井川柳は奉行所の取調べをうけている。日光とは東照神君家康公を指し、これのヤユしたものだというのが当局の言い分である。白州でその訊問に明快に受け応えして難を脱

れ、無名庵川柳の名を高からしめた。

天明七年十一代将軍家斎の老中首座松平定信が現われると、寛政の改革が断行される。特にこの中の風俗に関する出版ものの厳重な取締りが寛政二年十二月に実施され、戯作者や浮世絵師、それらの出版業者に対し身代没収、又は半減、手鎖江戸追放等が相次いだ。

柄井川柳は寛政二年、この厄を見ることなく他界したが、時に柳多留は二十四篇にさしかかっていたが、寛政三年この時点で既刊分までさかのぼり削除改刷を命ぜられている。その「誹風柳多留」で削除を受けた句数は、初篇四、二篇五、四篇七、五篇一七、六篇二三、七篇二五、八篇二五、九篇一〇、十篇一八、十一篇一一、十二篇一五、十三篇二三、十四篇一一、十五篇四、十六篇七、十七篇一六、十八篇五、十九篇一四、二十篇一四、二十一篇一六、二十二篇八、二十三篇一四、二十四篇九の合計三百一句（岡田三面子調べ）の多数に上っており、このためか寛政四、五両年は休刊している。

この当局の忌憚にふれた三百余句は、お上批判とおぼしきものは、役人や奉行職、日光細工あたりで、これらの風刺吟も厳密にいえば、そう騒ぐほどの痛烈さはない。削除を命ぜられた他の句は、大半が賭博や、不義密通、隋胎等が対象で、意外なのは、少々のおいろけは、お眼こぼしになっていることだ。

この原因は、日光細工の調べに当り、柄井川柳は、貝原益軒（一六三〇～一七一四）の「養生訓」や「女大学」をあげ、男女間の色ごとは人倫の大本であると説明した効果らしい。花久が「誹風末摘花」初篇を出したのは安永五年だが、右の話を引き合いに出すと、初代川柳の選だけにどうやら一応のつじつまはあう。

数少い柄井川柳の挿話の中で有名なのは

―天人は小田原町を覗いて居

の句である。川柳が難解句としてもて余していると、傍らの妻女が浅草寺の観音様の合天井に天人群舞の絵があり、その下に小田原町献納の大提灯があり、中央の天人の一人がまるでそれを覗き込んでいるようにみえた。この由を夫に告げると「川柳は横手をうってこの句を高点に据えぬ」と柳下亭種員の「新篇歌俳百人選（嘉永二年板）」にある。川柳の趣向（穿ち）第一主義の選句ぶりがうかがわれる。

この妻女は天明六年に死んでいる。夫の初代川柳に先だつこと五年で、同年二月十七日が命日、法名微妙院浄法性信女。その翌月の三月十七日に若采連、井桝連共催で「女柳追善句会」を催し、可有が柳多留二十一篇に載せている。この本の追善句会の句稿採用はこれが最初である。女柳というのは川柳の妻というより表徳だったのかもしれないが、その句や俗名、享年の記録が見当らない。

妻女を失い一年おいて大黒柱の可有を亡った柄井川柳は、めっきり力を落し、寛政二年（一七九〇）九月二十三日（陽暦十月二十日）七十三歳をもって長逝した。浅草の天台宗金剛山竜宝寺に葬られ「契寿院川柳勇縁信士」の法名を同寺十世の恵隆上人から受けた。

―木枯しや跡で芽をふけ川柳

というのが辞世だそうだが、柳多留はじめ初代川柳関連の刷ものには皆無である。

この句が辞世として世に残ったのは、五代目緑亭川柳（水谷金蔵）が建立のその菩提寺竜宝寺境内の「柳祖翁五十回忌追善」の碑面からと思われる。裏面の建立日は「天保十巳亥年九月吉詳日、五代目川柳世話惣連」とある。碑は根府川石で高さ　　の自然石だったが関東大震災で根元約四十センチを残して破砕し、後にあった柳も枯死したが、やがて句面の句の通り震災後芽をふいた。

（阪井久良伎がその枯木の一部を所蔵していた）

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

浜野奇童

はぐれ蜂ひとつ仁王の腕に来る

黒川　紫香

はぐれ蜂と仁王の対照が面白く共感を呼ぶ。弱い者、迷える者の心情が、仁王の腕によって笑えない喜劇となって鑑賞者に迫ってくる。

週刊誌となりも同じページ読む

森田カズエ

偶然発見した偶然でない事実への驚き。ありうることである。お隣りさんの眼もこちらへ眼を移していたのではなかろうか。週刊誌であるだけに、そのページの内容が読む人物をも色々に変えさせる。読んでいた内容が気になるユーモアの句である。

課長補佐酒の飲み方まで教え

野田素身郎

何気ない取材と表現の中に、酸いも甘いも知りつくした世話好きな中間管理職の立場をうまくとらえ、人物を浮き彫りにしている。楽しい職場の雰囲気さえ彷彿とさせてくれているようで面白い。

どの顔も金が欲しいと言わぬだけ

工藤　甲吉

主張に右や左は有ろうとも、欲するものは皆同じ。よくある句境であるが表現の方向を変えて新鮮さを感じさせる。建前と本音をするどく突いた句で、第三句の「政治屋」と重ねてみると一層痛快である。

まっすぐに歩けば風も陽も味方

嘉数千代香

真実一路の道は遠いが、それを求めてひたすら歩み続ける姿は美しく尊い。時に波風有ろうともそれは神の一時の戯れかも。すべてを味方ととらえた心情が美しい。

団地から満艦飾の五月晴

松本　忠三

中七が見事にこの句を引き立たせた。団地の干物には働く者の生命力が溢れている。五月晴れの空も正しく団地から活き活きと生きて働くのである。

ご先祖の自慢ばっかり無職です

田垣　方大

人間の弱さをやんわりと穿って妙。川柳の味である。職の無い弱さは必要以上に気後れを感じさせる。人に伍する時何か自慢するものがほしいのが人情か。たとえ功なり名遂げた人であっても。

この孫へ夢を預ける馬になり

本多　柳志

「この孫」と限定して馬になった好々爺の温かい雰囲気の中に、孫にかける期待が溢れる。

質屋からこれは偽物だと言われ

森田　布堂

家宝ともいうべき自慢の代物。恐らく訪れる人々にその由緒が語られ愛でられたことであろう。それがこともあろうに、持ち主のゆがんだ顔が眼に浮かぶ。上五が川柳にまとめた。

強いられぬから合唱の声となり

水粉　千翁

人間の心底から湧き出る力の素晴らしさと強さ。到底第三者の力ではどうすることもできないのである。合唱の中に、下から盛り上った庶民の声が木霊する。

土を恋う花のつぶやき壺が聞く

両川　洋々

素晴らしい壺に美しく活けられ、多くの人人に愛でられる花も、所詮はすでに生命を断ち切られた屍に過ぎない。土を恋う花のつぶやきは生への憧憬でもあろうか。気紛れな人間への自然の抗議であるのかも。

繕うた顔へ鏡はうなずかず

若宮　武雄

生きるために美しく繕わざるを得ない女性の悲しみすらうなずいてはくれない鏡である。心と逆に生活の糧を求める女の淋しさを心憎いまでに詠いあげている。

誌面の都合で鑑賞できないのが残念だが、ゆっくり味わってみたい句を列記する。

アドバルン翔びたかろうに空の青　秀子

のんびりと市電がかすむ古都時雨　和子

忽然と消えたし零番ホームから　史好

柳三山室

誹風柳多留廿五篇研究

鈴木　黄・室山三柳・入江　勇
西原　亮・清　博美・八木敬一
紀内恒久・青木迷朗・故岡田甫

（三十丁）

544　**かへちよろにおれがかりると野掛みち**

鈴木＝「かべちょろ」は、壁著羅・壁千代絽と書き、壁糸をよこ、縮緬糸をたてとして、縮のような細かい皺を織り出した絹布。地合厚く、江戸末期に多く帯地に用いられた。

のどかなハイキング風景。かりるのは勿論タバコの火。ハイキングの途中、たばこがのみたくなった。そこであそこにいるかべちょろを着た小意気な洒落た人から、私が「火」をもらって来ましょう、という意味のスケッチ句。

紀内＝今もよく見られる風景。

西原＝賛。『胆大小心録』に「壁土のやうな色で、糸がちょろちょろと見へるゆへ、カベチョロとはあんまり也」。おもしろい言葉なので利用されたのであろう。

岡田＝諸文献に出てくる「壁ちょろ」は主として、しゃれた流行を現わしているようである。

545　**上田の古着も大阪でひとはれ**

鈴木＝真田幸村は大阪方（秀頼）で唯一の知謀にすぐれた忠臣であり、真田家はもともと武田信玄に属し信州上田を領していた。

大阪夏の陣で忠臣真田幸村が大いに知謀をはたらかせたが、ついに戦死した事は、大阪の人々は百も承知している。その徳があるので、上田の古着は大阪では大いにもてはやされる、という意味であろう。

室山＝賛。「上田の古着」は、関ヶ原の戦の時、幸村は父昌幸とともに上田城に籠って徳川秀忠の軍三万八千を相手としたが、関ヶ原敗戦により、高野山の麓の九度山に謫居した。この事実に上田の名産上田縞をきかせていったものである。その後、大阪冬の陣、夏の陣に活躍した。それを「ひとはれ」といったのである。

青木＝賛。上田縞も真田父子のおかげで格別名声を高くした。

上田の古着大阪の晴着なり　八四・10

一反を子にたちわける上田染　九二・36

岡田＝室山説の通り。

546　**十三日さゝっぱほとのなます也**

鈴木＝十二月十三日煤払のスケッチ句。当日は、下女・下男猫の子にいたるまで忙しいので、食事の用意が出来ない。そこで一番簡単に出来るなます、しかもほんの僅かばかりの量しか出なかった。ささっぱは煤払の笹の葉にかけた語。

室山＝賛。『絵本江戸風俗往来』に煤払の式の膳部が記載されているが、その中に「田作の生酢」というのがある。民間もこれにならったのであろう。

入江＝賛。忙しいので細かく切らず、ささっぱほどの。

八木＝入江説賛。

なますハふときをいとわぬ十三日　安五・智2

岡田＝入江氏説ご明解。八木氏ご引用の例句また適切。

547　嫁の面テハ白〳〵と十三日

鈴木＝これまた煤払の句。主八以下皆が真っ黒になって働いているが、嫁は仕事をしないので顔が白い。きっとこの嫁さんは妊娠でもしているのであろう。

室山＝賛。かしこい嫁なら、

十三日嫁子をかりてなんをさけ　天八・一二・二五

としよう。

「面テハ白〳〵と」は、謡曲「三輪」の、「人の面しろじろと見ゆる」の文句取。

紀内＝同。「面も白〳〵」の文句取は数句ある。

青木＝同。礎稿の妊娠説面白いが、主題句は室山氏説の文句取だけであって、他意はなさそう。鑑賞は人それぞれにまかすというところか。

岡田＝同。

548　駒形をかけて茂兵衛を親仁見る

鈴木＝京伝作『将門秀郷時代世話二挺鼓』に、「秀郷、これを見て曰く、われは親王にまさりて姿が八ッあり、お前の目には見へまい、此眼鏡で見給へと、駒形の眼鏡屋にて買いし、八角眼鏡にて、姿を見せる」。また文政七年版の『江戸買物独案内』(花咲一男編)に、浅草駒形町美濃屋平六、本家唐物類品々紅毛物御眼鏡所と広告文が出ている。

したがって、句の「駒形」は駒形町で売っている眼鏡であろう。「茂兵衛」は、武鑑の板元であった須原屋茂兵衛。

句意は、親王が眼鏡をかけて武鑑を読んでいる、といった所。

室山＝賛。要は礎解の句意を、地名・人名であらわしたのがねらいの句。

岡田＝賛。

549　土器に下戸むすひめをとらへてる

鈴木＝「かはらけ」は土器投げの略称。京都では愛宕山、江戸では飛鳥山で専ら行われたが、時期は概ね花見時で、花見の人々がこれを力の限り遠くに投げ、そして興じた。

句意は、酒に酔った仲間が、山の上から土器を投げているが、足もとがフラフラして危険である。そこで酒の飲めない下戸が生酔のこの仲間の帯の結び目をしっかりとおさえている。花見時の一スケッチ句

西原＝賛。

土器のわれるも花のさかり也　四〇・17

飛鳥山毛のないものを投げちらし　安四鶴3

飛鳥山座頭おどけて一つ投げ　五・28

(座頭は毛がない)

岡田＝同。

水府忌におもう

不二田一三夫

寝台を半分立てて今日はじめてこんなポーズで書いています

カットは、水府先生からいただいたハガキに書いてあったのを使わせてもらった。昭和40年7月15日の消印である。城東病院——水府。

写真おせわになりました。カベ一重へだてて賢妻、愚妻にうけわたしをしました。トナリも足がわるくなり、私も今に立てません。清幸君一枚写真を選びお返しも引きうけてくれました。ありがとう。

路郎君のゆかたのシャシンになぜかナミダ催す。

ハガキの表面に川雑終刊8月との通知うけ粛然としました。あと乱立になるより一本でタレか出来ぬものか。

とある。文中の「写真」とは、40年7月7日に亡くなられた路郎先生の追悼記事を番傘誌上に載せるため、写真を借りたいとのおたよりをいただいたので二十数葉お送りした。「トナリ」とは奥さんのことか？「清幸」とあるのは斎藤清幸編集長のことである。

7月19日付のハガキには、

路郎君の本葬には二五〇人会葬の由、生々庵君出席、三太郎君、塊人君らと十三郎、青風君ら弔辞。私の代読（砂人）は、オミットされ、霊前へおそなえのよし、奉書の巻紙に仰臥の書、ざんねん。やっぱりさいごまで御縁無之、宿命と存じます。今、電気マッサージをおわって。—

「生々庵君出席」とあるのは、当時生々庵先生は「川雑」を離れておられたからである。水府先生の弔辞代読をオミットされた日、葬儀委員長は中島生々庵氏であったと、一部の柳誌で誤記されていた。

38年4月号を最後にぼくも「川雑」を辞めていた。約八年間、編集助手として、内弟子のような生活に終止符を打ったのである。感ずるところあって、川柳のセも口にすまいと思ってのことであった。

水府先生は、ぼくのことをご心配され、ときどきおたよりをくださっていたが、かならず、「川柳をやめてはいかん」と、一行入っていた。

小豆島のある醤油会社の宣伝標語を「関西標語作家連盟」のメンバーと第一予選をさせていただき、先生の御選をお手伝いしたことがあった。また布施市のある呉服店の宣伝標語をぼくが選をしたとき、水府先生は「川柳のほうを引きうけられたが、応募数が少なかったのでぼくが両方やらせていただいたこともある。

先生がNHK落語研究会の顧問をされていたころ、ぼくはNHK台本研究会のメンバーだった。よくNHKでお会いしたが、ついぞただの一度もごあいさつをしたことがなかった。―ぼくは番傘をライバル視する「川雑」の編集部に籍を置いていたので、敵の総帥？に近づくことを避けていたのだ。それが「川雑」に対する仁義だと思っていたからである。

「川雑」を辞めてから、ラジオのディスクジョッキーや漫才台本を書いたり、夕刊紙にあやしげなモノを送稿したりして、どうやら生活も安定してきたころ、中島生々庵先生から、雑用の手伝いをしてくれとのことで、実は体裁のいい〝居候〟に小遣いをくださるお話があった。―川柳抜きという条件でお世話になることになった。これが足がかりになって川柳復帰を恐れたからである。

水府先生からもよくおたよりをいただいた。「何をしているのか」というおたずねに、生々庵先生のお宅で、医学上の新聞の切り抜きをしていますとお答えしたら、昭和39年7月号の番傘の巻頭〝句帖〟に

―**新聞を切り抜くくらしなど知らず**　水府

を拝見して、先生から一句いただいたことを今もうれしく思っている。

水府先生ご夫妻から三回も夕食のお招きを受けた。川柳抜きがいつもの条件だが、やはりいつのまにか、川柳の話になっていた。ご近所のバーベキュー専門の店で、山賊焼きとかいうのが〝看板〟の店のようだった。

いろんなお話をうかがっているうちに、水府先生と路郎先生は、やはり強い友情に結ばれていることが強く感じられたことである。

「どんな事情で辞めたか知らないが、もう一度、帰る気になれないか」

「その話は抜きの約束ですから」

「……柳社の仕事ならなんでも出来る人のいない今日、あんたのような人を失うのが惜しいから」

と、なんとか辞令を何度もうかがった。

「雑誌ぐらいは読みなさい」

と、番傘から出ている刊行物を全部いただいたうえに、「番傘」を先生から送っていただくことになった。先生がみずから贈呈される方が二十二、三人だそうで、その中にぼくも入れてくださったのだ。それが今日なお続いているのである。

先生ご夫妻とのお話がおわって、帰りぎわにかならず、先生は奥さんの方をかえり見られ、「不二田さんに、番傘へ来いとは一と言もいわなかったこと、キミが証人やで」と笑いながらいつも云われたものである。―実は、ぼくは、川柳をするなら「番傘人」になっていた筈なのである。

というのは、最初に活字になったのは昭和六年ごろ、久良伎選だったが、あまり興味がわかなかったから川柳のことなど忘れていたが、番傘同人の弁咲美志さんと芸能方面でお近づきになってから、番傘同人にすすめられ心斎橋筋にあった句会へも連れて行ってもらっていた。また友人の俳人に連れられて川雑の句会にも顔を出したりしていた。そのうちに今は亡き須崎豆秋氏や山本葉光氏、または路郎先生直接の推薦で同人になってしまったのである。あとで美志さんから叱られた。

「川柳に本腰を入れないと云ってたのはウソだったのか」と、はげしく詰め寄られたものである。「では川雑を止めようか」といえば「今さらそんなことは出来ない」

番傘には友人が多かった。夫婦心中の予告電話を受けたのに救えなかった鳥居柳笑氏、鳥居金夫氏（作家・上方藤四郎氏）など。柳笑氏の場合、彼の窮状を水府先生に訴えたことがあった。不運にも先生が上京中で、帰阪されたときはすでに事が終っていたのである。

話がとびとびになって恐縮だが、両巨頭を40年に失ったとき、もし、どちらかが生きておられたら、大阪柳界はどうなったか？　路郎先生が残られた場合、水府先生がご健在であった場合、そこに第二のドラマの幕あきがあったのではないか。

40年7月末「川柳塔」創立に、あれほど堅く柳界から逃避しつづけてきたぼくがまた編集することになったのをまず一番に水府先生へご報告申しあげた。

水府先生の逝去二日ほど前のおたよりなので読んでいただけなかったのは残念だった。

水府といえば川柳に通ずる柳号である。この水府という偉大なる柳号を後世に遺すため岸本吟一氏が二代目を襲名されたらどうか。

菊沢小松園選

月見草酒酔い事故をそばでみる　鳥取市　中森葉士人
ひとすじの人の道にも信号機
クラス会の果ての軍歌へ背が丸い
太陽の恵みに麻薬の実が育つ
家長の座とられて背中の貼り薬　鳥取市　森田熊生
岩まさか水に嚙まれるとは知らず
海青く青く魚の声を聞く
酔ってない証拠言い訳考える
もう一人すねたのがいてもめてくる　山口県　高崎喜一
考える人にも海は青だった
新妻の手でネクタイが直される
むつまじい足跡を消す波うねり
肩書がとれて記者にも見向かれず　島根県　角耕草

水盗む上を夜汽車が通りすぎ
マンションに取り囲まれて田を植える
稲株に出水の鮒がつき当り
演説が下手で百姓納得し　大阪市　西出英子
スーパーで一円玉は生き生きと
サングラス外界と私と遮断する
ストレスを蹴る石もないアスファルト
妻として時には受ける変化球　出雲市　園山多賀子
強い球やんわり受けて返すコツ
潔よく散る花未練の実を残す
小心な男の余芸煙草の輪
いたわりの芸の細かいとこを見せ　熊本市　有働芳仙
アルバムのここから君と僕がいる
駅売りの土産で女房だまされず

失職へ働く妻の靴磨く
選挙戦聖徳太子目が廻り
米子市　青戸美佐

ひとさしに扇静かに孤をえがく
古伊万里の皿に先祖のおもい秘め
海外へ日本の頭脳逃げたがり
忘れたいキズを世間はまだ囃し
堺市　大道美乙女

再会の二人に匂う花時計
モデルだけ似合う帽子で街をゆく
五ツ珠持たすと母の早い指
大阪市　小谷清女

布団干す重さに老を知り始め
腕あげた妻のビールの注ぎっぷり
神経も使って走るハイヒール
西宮市　山田喜代子

雑踏に自分の顔を見失ない
物価高ケチ精神が見直され
やりくりの食卓今日は肉無しデー
米子市　雑賀美世

別居してどちらもしびれ切れはじめ
健やかにどの歯ぶらしも濡れて明け
錦絵の皿にサラダが落着けず
唐津市　浜本義美

父の日を田植さなかにする政府
汚れ手に白手袋で票集め
使い捨て着捨てが店を太らせる
三重県　川上渓水

笑えない場所に喜劇が多すぎる
全力を尽して負けてもやはり悔い
日曜大工せめて道具をほめてくる
岡山県　柳原孝柳

売る物もなくて明日を買う女
宝物にふれて小供にしかられる
切れ味にあぐらをかいている刃物
大和高田市　岸本豊平次

住む人も団地サイズでこましゃくれ
今月も又水引のいる出費
真清水も流れ止めれば腐りだす
兵庫県　中田白李

能面のとおりの素顔になっている
留守居する日の玉露には味がない
年金で畳替えなどできはせぬ
大阪市　堀口欣一

一の宮千本松のある限り
延若の眼尻上方生きている
わが読書立川文庫のむかしより
大阪市　白石潔

生きる努力教えてくれた車イス
遠くから児らが挨拶してくれる

故郷に帰えれぬ男が仰ぐ空
八尾市　高杉千歩

菜の花畑大和の蝶は器量よし
故里につづくレールのそばに住み

待つ事に馴れて針山きしむ夜
大阪市　藤森小雅子

月曜の朝軽ろやかな靴すべり
労災で貰う抜糸の事故等級

父と子の絆哀しいシャボン玉
岡山県　池田半仙

隣より一尺高うする敷地
颯爽と顔の自信のハイヒール

雨を呼ぶ唄しか知らぬ雨蛙
米子市　寺沢みど里

一人抱く胸の炎を天に吐き
それなりに意見を吐いて幼稚園

惚まいと趣味で頭を刺激する
旭川市　朝倉大柏

円満な妥協に嘘もうまく混ぜ
裏山よ泣いた童話は言うまいぞ

スト明けの電車寝呆けたように来る
呉市　山根里香

夜の灯へ積木手許が狂いだす
聖書繰るページへ埋める罪ひとつ

古傷を埋めて明日へ虹を抱く
大阪市　鍛原千里

横むいた愛に捧げる花がない
明日でない今ひと時が走りたい

夫婦のパズルやっと形になって来た
羽曳野市　麻野幽玄

返されぬ金の利子など計算し
会釈だけ受けとく噂の多い寡婦

投票所で握手の温み思い出し
大阪市　村上田鶴子

選挙近く急に知人が多くなり
無慈悲なりゴキブリを追う目の色は

合せ鏡の間で女の夢が翔ぶ
吹田市　藤原世史春

天気予報傘が荷になる今日の幸
いいわけも出来ずに蟻は潰される

溝浚う妻の健康今日の幸
大阪市　杉本智慧子

何もかも知りつくし給う母います
大型ゴミ贅沢な暮しが捨ててある

働いた鉢巻汗の臭いする
唐津市　浜本久仁於

夜も尽きて思案を明日に延ばす首
唐津市　山下勝一

浮き沈みして生きてゆくかいつぶり
具志堅防衛人気総理の上をゆき

変身もくびの皺までかくされず　兵庫県　山根左春

口説かれて本気で断る夢の中　岸和田市　藪野ケイ子

増築をしただけ家具で幅を取り

外食から帰って家の茶漬食べ　豊中市　満仲きく子

草笛を吹けば故郷が近くなる

ターミナルカセットで鳴く鳥の声　寝屋川市　福富隆子

インキョ部屋空気も声も走らない

子育ての花屋素通りくせになり　兵庫県　野々口ゆう也

金婚の賀を受けて

五十年夫婦の波長合わぬ日も

金婚の余生阿呆になり切って　今治市　新居田胡頽子

阿波の遍路旅より

れんげ田の中へ吸われてゆく遍路

マイカーで足を塞いだ遍路道　鳥取市　和井観洋

もう時効内ポケットから花名刺

もう一度はずめばきっと踏み外す　大阪市　平井露芳

ゴキブリを打つなと一茶のたまわず

西暦で云って昭和で云い直し　倉吉市　今村夕路

新しい紙幣は財布になじめない

針の穴通すママさんまだ頑固　名古屋市　越村枯梢

それなりに生きて子も出来孫もでき

団地サイズ雀も小さくなってくる　鳥取県　武田照子

夏休み目さまし時計も夏休み

聞き慣れたはずの小言が胃にもたれ　大阪市　林ひろ子

母の皺わたしの不幸の積み重ね

語らいもテレビ相手の留守の家　和歌山市　堀端三男

前略で通じる手紙なら書こう

初恋の面影青いまま残る　島根県　松本文子

造成地山の怒りが聞えぬか

石牢のよう病院の門は閉じ　広島市　光井みほ

花鋏だって生きる権利を主張する

来客へ今日花鋏おどってる　倉敷市　大森登竜

総桧容赦をしないツバメの巣

事故もなくビルの谷間をとぶツバメ

父の日は母ほど持てず騒がれず
岸和田市　津田千舟

うっかりとバーのマッチでお燈明
広島県　砂田静佳

風習はどうあれ若さまっしぐら
世の中はどう変ろうと蟻の道
西宮市　野呂鵜汀

盆栽の果実は食べぬまま腐り
招かれて刺身のツマの位置に座し
京都市　山本桐下

鍵っ子の下駄がきちんと脱いである
信頼をされてる位置でめがね拭く
島根県　星野侑正

シュッシュッとコマーシャル程に蚊は死なず
減反へ親子の意見かみ合わず
高知県　赤川菊野

面影を抱いて再婚話聞く
落人の里能面の千枚田
岸和田市　吉水照江

世の中に負けずに泳げ鯉のぼり
苦労したおかげ顔色すぐ見わけ
今治市　矢野佳雲

鬼の首取るよう白髪抜いてくれ
片っぽが曲ればついてくるレール
高知県　山下登舟

白蓮の咲いて泥池よみがえり
我が齢のあるを信じて接木する
新宮市　辻弐

直線を歩めば遠い遠い道
仁王像後姿の哀れなる
大阪市　大野武太

職人の言葉にくらしのリズム生き
掘りおこす一票ドブ板ふんでゆく
富田林市　中村優

喪服着て泣かねばならぬ業をもつ
ハイと言う風紋のない宮仕え
高槻市　竹内花代子

傷口に触れるブザーを押したがり
地図出して昔の旅を追うている
青森県　田中叶

かなしいに木魚愉快な音たてる
ねころべば小銭こぼれる一人もの
岡山市　串田句味地

一徹が過ぎて主流に隙が出来
梅檀の葉陰に土用の風薫る
新潟県　高野不二

省エネに協力昼寝長くなり
娘と見てるから恥しいラブシーン
諫早市　江副二牛

どん尻で出た学校へ寄付頭

友情の度を超す善意もてあまし
島根県　堀江百代

見えすいたうそでもそっと乗ってやり
選挙戦遠くに聞いてひとり住む
京都市　松川芳子

雑踏の中へ自分を見失ない
宝くじ買わず気になる当る人
長崎県　岩崎和子

けつまずく小石に歳かとも思い
土盛ってモグラがかけたサングラス
米子市　桑原伊都

日本酒と洋酒にわかれ飲む親子
休耕田農政不信の草のびる
米子市　野坂なみ

時移り流人の島へ観光船
意地張って見ても所詮は寡婦の身で
今治市　渡辺南奉

灯を消してしばし宇宙を一人じめ
どちらから吹いても噂届かない
島根県　福間芳枝

十円で恋をささやく赤電話
同じとこかいてる皮膚科待合室
倉敷市　中島彩平

浜田市　佐々木裕

人生のゴールにすました顔写真
夏の雷驕った暮しがおどされる
八尾市　田中紀美代

はしたないなどと興味はもっており
親切な矢印かなりの遠まわり
米子市　田中並弥

無精卵にわとりせっせと生み落し
まがりかど微風頼りの白い杖
羽島市　伊藤静枝

一坪の庭にも自然の摂理あり
カーネーション遂に白なり美喜夫人
大阪市　村島秀村

迷い子の実例みせている雑踏
しつけ取る母の涙を見る晴れ着
大阪市　斉藤きくみ

天国も物価高いか流れ星
やりくりで生活もめるひまがない
大阪市　橋元美恵

彼にいう指輪のサイズ小さめに
スキャンダルあれもこれもと大サービス
東大阪市　坂本喜洸

物価高亭主の価値は安くなる
冗談の返事に金を払わされ
兵庫県　藤原捷一

夏蒲団想い出せない夢ばかり
カレンダーも半身となって夏が来る
和歌山県　時田誠一
明日に死が見えても今は生きている
男とて愚痴を言いたい時もあり
和歌山県　天満三千代
明日はあす今日を無理なく生きている
梅雨空のわが家に小さな低気圧
出雲市　石倉芙佐子
紫陽花に長い一日暮れかかる
すっきりと背筋を伸ばす博多帯
鳥取県　羽津川公乃
影武者がひょっこり出そうな城下町
青信号ゆっくり渡る日のゆとり
和歌山市　坂部紀久子
嫁ぐ娘に平凡な言葉しか知らず
充実した多忙疲れは感じない
島根県　岩田三和
親鳥は胃からエサを出しあたえ
コンニャクの中までしみる人間味
東予市　小山悠泉
暮しの詩が鉄板にある焼肉屋
尊敬が思慕と変って来た手紙
鳥取市　武田帆雀
石投げた日から懐かぬ犬になり
作戦を変えたか近頃慣れなれし
橿原市　西本保夫
銀婚で来た温泉の湯がきれい
銀婚の旅はゆとりのスケジュール
米子市　菅井来知
アメリカのくしゃみ五輪の輪がはずれ
頭金出させて同居ことわられ
唐津市　田口虹汀
三十度なに風船も止まってる
保険迄かけにゃ遊べぬ草野球
東広島市　坪島美津江
どの花も競って媚びて夢をくれ
泉佐野市　大工静子
久し振話が余る別れ道
大阪市　野田君枝
五月晴れ公園埋める赤い旗
尼崎市　中谷利美
死なれては困る程度の愛妻家
尾鷲市　渡辺伊津志
風の音が聞き分けられる職に生き
尼崎市　小林文月
ポスターガ次々浮ぶ投票所
大阪市　山本炉斉
大文字年中行事の火も消える
交野市　山本テルミ

肩書きのない末席が派手に飲み
大阪市　内藤ますえ

気は若くガラスに写る背のまるみ
尼崎市　中辻千子

思い出を語る法事の宴の果て
大阪市　田口なり子

新婚がなかった様な十年目
兵庫県　山根左春

此の夏も又出会えたよビキニの娘
大阪市　岡田ふみ

極道の手柄はもらった良い嫁女
大阪市　越田寿幸

やりくりに追われいつしか皺がふえ
倉吉市　野中御前

国会のテレビがとらえた大あくび
唐津市　桑原掬治

やがて去る子のため尽くす親つばめ
唐津市　仁部四郎

駅のない村になにやらホテルあり
唐津市　木塚素石

貧乏を笑って話す年になり
兵庫県　伊沢午郎

里帰り一泊の娘へもの足りず
倉吉市　田民碧水

さりげなくトイレ流して知らん顔
八戸市　島田昭治

安らぎの夜は子がいる孫がいる
島根県　岩佐富子

農薬は天敵まで皆殺し
島根県　山根峰雪

候補者のオネガイシマスにフンまたか
青森県　波ただお

本人も父の日忘れて居るらしい
大阪市　岩田八文銭

世渡りへ親子どんぶりからヒント
東大阪市　三宅哲夫

値引して押売された品重し
神戸市　久保禎三

★

思いつめた行為十九の出来ごころ
名古屋市　**鈴木可香**

呑んで吐かされて哀しき鵜のさだめ

夏風邪へ昼を小暗く蚊遣香

印刀に睹けて猫背に老いを増す

立読みをめがねの奥で監視する
大洲市　**米沢暁明**

花なえて水が欲しいと正直な

頭から造花へ寄らぬ蜂や蝶

料理教室家では一度やっただけ

明治にはまだ親しめぬアイシャドウ

岐阜市　**市川鱗魚**

駒の出る瓢に欲目の苦笑い

母の持つ針は身構えたりしない

妻愛す終身刑の明り窓

小賢しい女の嘘の仇討ち

愚かしき人味噌汁を朝とする

第四回 全日本川柳大会

橘高薫風

司会　寺尾俊平
開会の辞　川柳岡山社副主幹　延永忠美
大会委員長挨拶　日川協副理事長　藤島茶六
大会実行委員長挨拶　川柳岡山社主幹　大森風来子
祝辞　岡山県教育委員会文化課長と
岡山市教育委員会文化課長
米国ポートランド市バラ吟社　斉藤竜子

第一部

芸　島根県　柴田午朗選
輪　東京都　渡辺蓮夫選
山　島根県　尼　緑之助選

第二部

時事雑詠　新潟県　大野風柳選
パン　兵庫県　小松原爽介選
流れ　広島県　石原伯峯選
なさけ　岡山県　丸山弓削平選

文部大臣奨励賞ならびに大会賞発表
授賞　藤島茶六
閉会の辞　日川協副理事長　山田良行

最後に斎藤竜子さんの音頭で万歳三唱。

第六回日本川柳協会総会

次第

司会　永田帆船
開会の辞　副理事長　藤島茶六
挨拶　理事長　中島生々庵
新任常任理事紹介　副理事長　山田良行
議題
会計報告　常任理事・大阪事務所　広瀬反省
〃　・東京事務所　臼倉寿夫
事業報告　〃　西尾栞
事業計画　〃　増井不二也
閉会の辞　〃　酒井路也

中島生々庵理事長欠席のため、挨拶状を藤島茶六氏代読。

斎藤大雄氏（札幌市）から、一、印刷物（決算、予算、事業その他）の用意の皆無なのは遺憾、一、繰越金の増えている理由と用途の工夫のなさ、一、未納会費の発言があったがその会費の処置について、以上三項目の質問あり、それぞれ、陳謝や説明があった。

山内静水氏（竹原市）から川柳大会会場で貰った句箋の大きさが小さ過ぎて大会としては貧弱である。日川協で前年決めたことは、日川協の当局は守って欲しいと発言あり。

受賞作品

大会賞

文部大臣奨励賞
昨日の皿に昨日が残るパンの耳　神戸市　伊佐次　無成

定年が延びて首輪が重くなる　東京都　川村せいりゅう

うらぶれた芸も烈しき津軽三味　新潟市　粟田　九十九

もう秋だなと山頭火の山がある　大阪市　神社　優志

標本の針アフガンは蝶になる　岡山県　丸山弓削平

能面の下に阿修羅の血が流れ　米子市　佐伯越子

なさけの糸がつむぎきれないまま暮れる　井原市　徳永操

★中島生々庵理事長は腰痛のため欠席、ご心配をおかけしました。

愛染帖

橘高薫風選

青森市　工藤甲吉
人間も陽炎だったナンマイダ
金の光は仏の光より待たれ
倉敷市　水粉千翁
うなずいて又うなずいて夫婦老ゆ
絵具皿黒には弱き虹の色
高知市　西川富恵
少年の瞳に満ちてくる祭の火
夏草を駈け少年のふりむかず
八尾市　高橋夕花
梅雨のむこうで聞えているのは手毬唄
ひと握りの塩が私を大きくする
兵庫県　遠山可住
金魚鉢金魚に水平線がある
雨つぶの夢がこわれる窓ガラス
米子市　八木千代
皮財布亡父の名刺をお守りに
魚の瞳をあつめて青い海のいろ
岡山県　嘉数千代香
運のない夫とのぼる縄梯子
葛藤の中へ沈んだ角砂糖
島根県　小砂白汀
母恋いの軌道はずれし流れ星
黒人も白人も鼻はまんなか
町田市　竹内紫錆
寺だけを小さく地図は味の街
ナイターの顕はや光る好カード
兵庫県　中田白李
茶碗洗う夫茶碗の音させぬ
マニキュアの爪とがらせて日日淋し
浜田市　中川幸一
鬼の奴老いたわが胸から去らず
大阪市　川口弘生
犬繋ぐ一つの刑にあらざるや
鳥取県　鈴木村諷子
補聴器がほし言外の言をきく
宝塚市　吉田笑女
ちぐはぐな夫婦の趣味の花作り
今治市　月原宵明
あやめ咲く頃とはなりぬもつれ糸
鳥取市　河村日満
孫抱いて思想は右へ右へ寄り
大阪市　河野君子
鍋底をこがしてしまった嫉妬心
大阪市　小出智子
マーケットだけは夫を誘わない
笠岡市　高木桃里
神童の弟は左派で兄は右派
米子市　菅井未知
何時の間に籃を着こなす初夏の街
唐津市　新岡回天子
引込んで良い候補者の選挙カー
唐津市　浜本義美
城祭り五月の曳山は子に曳かせ
唐津市　岩崎実
藤の下藤を見上げる顔匂う
島根県　堀江芳子
生涯の味方生涯飲む薬
島根県　堀江正朗
聴覚と視覚寄ったり離れたり
川西市　戸田古方
大合唱天に向って葱坊主
寝屋川市　柴田英壬子
ふさぎ虫畦を通ってポストまで
兵庫県　野々口ゆう也
年寄りの浅酌心経低唱す
和歌山市　西山幸
四季のない母娘の闇に蛍とぶ
羽島市　伊藤静枝
カーネーション白のほかなし美喜祀る
尾鷲市　渡辺伊津志
人形の素足を母は寂しがり
笠岡市　木山遠二
猫も犬も人も身につけて居る家風
西宮市　妹尾春江
浴衣縫う娘に坐り方先ず教え
今治市　矢野佳雲
手紙にも個性定型外が来る
和歌山市　浦野和子
死を看取るとても明るい顔をして
和歌山市　坂口公子
手紙など読んでくれない鬼子母神
京都市　山本桐下
父と子の影が重なる土曜の夜
岡山県　出原敬一
友の訃がつづく日暗い貨車がゆく
西宮市　野呂鵜汀
終局において没落一間なり
唐津市　木塚素石

よく似合う若後家さんの夏羽織　大阪市　江城修史
負け犬に恋の噂がなく久し　倉敷市　中島彩平
点滴に居眠り覚ゆほどに癒え　大阪市　大野武太
フラメンコ我が老春の血がたぎる　高知県　赤川菊野
病床の父に甘えを持ってゆく　堺市　高橋千万子
真実を言うはずだった赤電話　高槻市　若柳潮花
祭り太鼓へ鶏を追いかける　岡山市　井上柳五郎
麦秋も死語が老農つぶやきを　名古屋市　越村枯梢
騙されることも知ってる騙し舟　富田林市　岩田美代
水をやる花屋が落した菊一輪　倉敷市　田垣方大
妻の意地来世も妻になってやる　倉吉市　奥谷弘朗
連休を待つこともない定年後　倉敷市　小幡里風
白足袋を少し汚して初舞台　和歌山市　坂部紀久子
笑い声遠く一人で草むしる　山口県　高崎喜一
病名をつけては補償を要求す　藤井寺市　児島与呂志
首ちょっと傾け梅雨を出る女　和歌山市　松原寿子
うす紫の罪ひき摺って女かな　岡山市　川端柳子
スタートがいい子いい子で居ようかな　尼崎市　黒川紫香
間がとれぬ女の口に飽きてくる　大阪市　朝倉利義
孫だいて妻は尻しく顔でなし　大阪市　藤森小雅子
五月空曇った眼鏡を拭きましょう　出雲市　高見鐘堂
藤棚をくぐる母さん車イス　和歌山市　若宮武雄
首相急逝して円が続騰す　平田市　角耕草
手袋が汚れそうでも手を握り　羽咋市　三宅ろ亭
大風呂敷判っていても面白い　出雲市　石倉芙佐子
逢えそうで来たのに白い風ばかり　京都市　都倉求芽
あの時の僕はイレギュラーしたヒット　大阪市　横地雅風
初当選議員権謀の顔でなし　唐津市　山下勝一
目に青葉だけで手が出ぬ初鰹　島根県　栂みどり
うす紅の女五十路へつつましく　京都市　松川杜的
うちの庭でも五月がいっち美しい　室戸市　室戸風子
角隠し隠しきれない影法師　富田林市　藤岡花梢
父の匂いに抱かれたいときがある　大阪市　白石潔
余生旅行周遊券はありはせぬ　東大阪市　竹中綾珠
父の日の無かった頃の偉い父　八戸市　小泉紫峰
花の彩散歩に出られぬ朝の雨　唐津市　桑原掬治
この自然入場料とは何事ぞ　島根県　木村はじめ
活け終えて物も言わずに老夫婦　浜田市　佐々木裕
生さぬ子と今日から生きる喪服ぬぐ　唐津市　浜本久仁於
一枚の写真に若い父と母　西宮市　藤村〆女
生涯の悔ヒロインは打ち明けず　貝塚市　行天千代
留袖も喪服もいらぬ年齢になり　倉敷市　藤井春日
やるせなく女ブルース口ずさみ　岡山県　稲岡正之
空白の心に沁みる母の詩　和歌山市　湯川頼次
故郷の山河分け隔てなく迎え　兵庫県　奥野テル
風かおる広場勇士の慰霊祭　大阪市　北勝美
くちびるに腰に菩薩の人間味　江津市　杖田よし昭
自立して母の軍手をなつかしむ　鳥取市　中森葉士人
梅雨の雨小言さらりと義歯洗う　兵庫県　辻文平
くらがりの棚へ惰性の夫婦箸　岸和田市　原さよ子
高層ビル通天閣を下に見る　八戸市　島田昭治
死んだ気になればと思ってみたけれど　米子市　石垣花子
労使解け花見るゆとり出た社長

和歌山県　時田誠一
美文ではないが心を打つ手紙
寝屋川市　江口度
母のする通りにしたら省エネで
今治市　越智一水
転作をすれば休耕せまられる
米子市　小西雄々
ドライブイン母に内緒の人を連れ
米子市　佐伯越子
火の彩を埋め母になる色を選る
和歌山市　堀端三男
ＯＫの合図は派手な方が勝ち
島根県　山根峰雪
今日だけは夫唱婦随でない選挙
岡山市　串田句昧地
肩貸すと云う友みんな文無しで
寝屋川市　宮尾あいき
薬飲むための食事をおこたらず
大阪市　小谷清女
成長の或日の孫が他人めき
京都市　山本規不風
黙って出た旅だ黙って帰りゃいい
青森県　五十嵐操史
晩酌は中身のみえる燗徳利
神戸市　山口美穂
紫陽花よ明日は変身する私
島根県　東原福子
シャボン玉虹の軽さを競い合う
西宮市　朝山千世子
清方美人ポスター艶に菖蒲園
米子市　雑賀美世
初孫の期待にはずむ毛糸玉
米子市　桑原伊都
人垣に吸い寄せられる好奇心
東子市　小山悠泉

歯が抜けた夢だあまって膳につき
和歌山市　津田与史
孫十八女を主張する媚態
出雲市　高橋可保留
不用意な仮病電話で見抜かれる
唐津市　田口虹汀
大ばくち打つ気で投票場へ行く
大阪市　欄蘭
雨上り紫陽花次の色考える
島根県　大野酔夢
呼び出しの葉書冷めたい冷めたい字
岡山市　池田半仙
嘘つけぬ男でいつも胃が痛い
鳥取県　羽津川公乃
殊更に大きなくしゃみで自己主張
豊中市　満仲きく子
喧嘩するうちが花よと慰める
松原市　本多洋子
バスガイド明るい声で梅雨晴らす
和泉市　西岡洛酔
長生きをしてやと妻のあどけなし
岡山県　岩道博友
ふと酒の話に歯がゆい事を言い
旭川市　朝倉大柏
やり通す子の泣き声が男めき
東大阪市　三宅哲夫
池の面椿の落花で見えぬ鯉
出雲市　板垣夢酔
土踏まずないから俺の孫である
兵庫県　円増貞子
許される嘘なら友を庇うため
大阪市　清水健司
職人が五時になったら帰りだし
岸和田市　古野ひで
静かなる川面の底の深さ知る

今治市　新居田胡頽子
暖かい言葉へ隠しきれぬ嘘
倉吉市　田民碧水
言訳の額の汗で嘘がばれ
倉吉市　今村夕路
数珠持てばいつか素直な心持ち
大阪市　土屋雅洋
約束と願いを聞いている墓石
米子市　青戸美佐
弥次喜多の道中今も世に受ける
島根県　岩田三和
納得の印ちょこんと頭下げ
鳥取市　武田帆雀
目も口も塞いで耳に重課税
和歌山市　内芝としよ
それぞれの愛を抱いて夜が更ける
広島県　砂田静佳
亡夫からの信号欲しい人生路
羽曳野市　麻野幽玄
背の子と仰ぎつ揚げる鯉幟
平田市　久家代仕男
自販機ふと働きすぎだなと思い
河内長野市　井上喜酔
粋な雨恋が芽生える御堂筋
米子市　野坂なみ
青い鳥見つけた日から迷わない
富田林市　中村優
川のない橋の別れに月がない
岸和田市　清野こう
叱ってる母も泣いてる反抗期
和歌山市　福本英子
野心家の夢票につながる顔ばかり
島根県　福間芳枝
金冠をちらりちらりと笑わせる

秀句鑑賞

—水煙抄—

—前月号から—

遠山可住

雑然と記者の机は生きている

有働　芳仙

するどい目のつけどころ。生き生きと仕事に追われ、仕事を追っかけている記者の姿が美事に描写されている。これが本当の記者の姿だろうなあと思えてほほえましい。

会社や公務員の机では「生きている」が効きそうにもない。

蟻の巣の上で花見の茣蓙を敷き

中田　白李

軽くてユーモアのほとばしる面白い句である。蟻が私たち庶民の姿に見えてくるかと思うと、私たちは案外気付かずにこんな自分勝手な罪をおかしているかも知れないと、作者は教えてくれる。

職人に連休はなし子を叱り

清水　健司

連休はすっかり国民生活の中に定着して来た。子供たちは友達と楽しくそのプランを話し合う。さてうちのお父ちゃんは何処へ連れて行って呉れるんだろうと喜々として尋ねたら「アホー」と一喝。ユーモアがただよう。

ゆるされる範囲で炎今日も燃え

田中紀美代

つつましく精一ぱい家庭の女になり切って生きている姿が美しい。あなたにも、子供たちにも決して迷惑はかけない、私ひとりの炎それは世の中の仕組みを知った大人の炎である。こんな人には若さが消えない。

洗濯をしたくなる様な川に出る

坂部紀久子

田舎に住んでいる私は毎日こんな流れの中で暮して来たが、この句には降参です。きれいな水の流れに「洗濯してみたい」とは何と女らしいあこがれでしょう。その裏側では清い水を汚してみたい嫉妬もちらりと顔をのぞかせていて——。脱帽です。

どんと打てどうせ浮世の馬鹿囃子

越村　枯楢

諦めか悟りか老が狭くなり

野々口ゆう也

年老うにつれ何ごとにもおっくうになって行動範囲が狭まって来る。

前句は客観的になっている思考の行動であり、後句は足の行動の狭まりである。その中へ自分が入って行ってもどうってことはない。若さとは「行動すること」と誰かが言った。

ハイハイの二度目のハイが気に入らず

小山　悠泉

なるほど「ハイ」はよいが「ハイハイ」とくると頭に来る。二度目の「ハイ」は全く人を馬鹿にした無責任なひびきがある。それが男にはたまらない。

行き届く女にあきる男です

堀内　柳仙

「自由がほしい」と言って家出した良い奥さんを持った男の小説を思い出した。文句の一つも言えない行き届いた女と暮すほどつまらぬ生活はない？　らしい。

いや、はじめはそれが世界一のしあわせであり、自慢でもあるんだろうが、「あきる」というぜいたくを持っているのが男という人間で、世間の人が不思議がっても、夫婦の間には当人でしか書けぬ答案がある。

熟れてゆく夕日の落ちる方むいて

岩田　三和

熟れるという実りの最後に来るもの、夕日という一日の最後に来るもの、美しく飾られる二つの自然の営みが「落ちる方むいて」適確に句になった。深い生活の詩。

共感五句

駄目な私に冷たい雨が心地よい

橋本　美恵

器用に生きて人間の顔がない

松本　文子

にくめない顔で物好き割って入り

有働　芳仙

妻からの電話下着を換えろとか

矢野　佳雲

シャボン玉男の夢は乗せられぬ

上垣内利凡

人生随想

鈴木村諷子

死ぬまで人間生きていなければならない
生きている限り何かをする必要がある
死んでしまえばそれまであとは残った人がやってくれる
死ぬまでしなければならないことをやればいい
勿論聖人ではないから金は儲けたい
安楽な生活もしたい
だがしかしそれらが私の窮極の目的ではない
それはこの地上に私という人間が
生きていたことを喜んでくれるような
少しでもいい仕事をしてゆきたい
人のためになることを
いい言葉をいい川柳を
残してゆきたいということだ
そしてわが事足れりと笑って死ねるような境地にもってゆきたいと
残り少い毎日を送ることを念願している。

壁

死という厚い壁がある
誰ものゆくてにたしかにある
生あるすべてのもののゆくてに立ちふさがって目にも見えず距離感もない
魔法の壁で
こっちから向うへはたやすくくぐれるが
向うからこっちへは絶対にくぐれない
みんな競ってこの壁をくぐろうとする
中には自ら求めてこの壁をくぐるものさえある
霊魂不滅だなんて
壁のこっち側からワイワイ言うてやがる
地獄だ極楽だって言うけど
この壁をくぐり返したものがないから
壁の向う側のこた判りゃせん
○驚天動地予告もなしにやってくる
川柳は一種の悟りだと私は思っている。

大阪の月曜日

—朝日なにわ柳壇

第32回 西日本川柳大会

とき 昭和55年9月14日（日）
午前8時半開場

ところ 岡山県久米郡久米南町下弓削
久米南町中央公民館

兼題 シンボル・影・計算・手帳・耳・見る・

選者 去来川巨城（明石）、西尾　栞（八尾）、小松原爽介（神戸）、河村日満（鳥取）、寺尾俊平（岡山）、片山巷雨（久米南）

席題 2題当日発表（12時しめ切り）

投句 各題2句以内、タテ22㎝、ヨコ4㎝の句箋に1句ずつ明記、裏面に雅号を書き、9月5日までに弓削川柳社宛（出席者は当日11時まで受付）

会費 出席一五〇〇円（発表誌、記念品、昼食呈）
投句　七〇〇円（発表誌呈）

呈賞 岡山県知事賞ほか9賞を総合成績で。

主催　弓削川柳社

6月から発足した朝日新聞大阪版の〝朝日なにわ柳壇〟がいま大阪柳人の中で大変なブームを呼んでいる。

毎月曜日の朝刊に番傘の片岡つとむ選と川柳塔の橘高薫風選が入選25句ずつ発表している。本社の副理事長、正本水客、川村好郎、菊沢小松園氏らも投句するという熱の入れ方である。これまでの新聞柳壇にこのような大家群が先頭に立った例はないようにおもう。

新聞柳壇といえば、どっちかいうとあまり好作家連は見向きもしなかったものである。ところが〝朝日なにわ柳壇〟はこれまでの常識を破る爆発的な人気をよんでいる。選者の熱もさることながら主催側の熱意もまた拍車をかけているのである。

「この一句」というのが毎朝の紙面を賑わしている。これも一ヵ月交代で一年間はつづけるという。両選者もご苦労なことだが、仕事としてはやり甲斐があるのではないか。

ぼくの不在中に個人的な用件だが朝日新聞社から電話がはいった。愚妻が受話器をとったのだが、

「生野　藤田恒子、というのは奥さんの句ですね」と声をかけてくださったそうだ。

ぼくが相手にしないものだから、句が出来るとご近所の智子さんや君子さんの家へ走るのだそうだ。

「天下の大朝日から筆名を覚えられたとは大したもんや」とオダテておいた。　（F）

塔　10句

菊沢小松園

人が居てそれから塔が出来上り
塔に登って人間小さなことを言う
東塔西塔何れも天を指して飽かず
塔聳ゆまだその上に雲があり
他人から静かな塔のたたずまい
完全を疑いながら塔下る
塔の下親子三代飴を売る
九輪水煙塔の静かに黙秘権
真すぐに登っているのに塔ゆらぐ
塔の上若い契りは揺れないか

川柳塔社常任理事会（七月三日）

若本多久志氏著「続・老いの坂」の本社扱いの売り上げ金、三万円を本社の発展費としていただいた。

路郎忌句会で角川書店編「新しい国語の書き表し方」を出席者におわたししたが、予想より多く出席者があったため贈呈できない方が出た。これは贈呈者の多久志氏から次ぎの句会にでもおわたしするとのことである。入手されていない方はご一報ください。

戸田古方氏がノドがわるく六月三十日に森の宮の成人病センターへ入院された。本多柳志氏は健康上の理由で常任理事を辞任。

9月14日は第32回西日本川柳大会。9月27・28日は松江市で同人総会。

出席―水客・潮花・薫風・栞・太茂津・与呂志・生々庵・萬的・小松園・好郎・一三夫

ホームラン

里小路選

九回裏意外なホームランで幕　美穂
ホームラン飛ばしてどっと出た疲れ　千代香
スタンドが二つに割れたホームラン　優
草野球タイムにさせたホームラン　佳雲
入るとは思わなかったホームラン　一路
お茶の間を釘づけにしたホームラン　酔夢
ホームラン無いことにする草野球　弘朗
ホームランの味忘れられない素振り　観洋
ホームランどよめく波に吸い込まれ　胡頽子
ホームランテレビ桟敷は箸を止め　どんたく
ドカベンの笑顔にあったホームラン　勝美
ホームラン一点だけを追うカメラ　久仁於
悲喜を分く逆転さよならホームラン　素石
ホームランバッター揃え又負ける　義美
ホームランの球も持ってる運不運　規不風
監督に見直されたるホームラン　勝一
さよならのスタンド揺れるホームラン　彩平
ナイターの靄が吸いこむホームラン　代仕男
母親の蔭から詫びるホームラン　青丹子
見きわめて悠々走るホームラン　登美也
乗っている男二度目のホームラン　七面山
ホームランが打てない妻の変化球　寿美
野球だけにあるホームランではなくて　古方
やりくりに母とっときのホームラン　大柏
ホームラン球跡追っているビデオ　秀峰
好投のリズム狂わすホームラン　武水
ホームラン風の重さを知っている　文平
散髪の鋏横向くホームラン　木魚
一発が流れを変えたホームラン　悠泉
助っ人ガムをかみかみホームラン　実
三塁で白い歯見せたホームラン　白李
土壇場で男を上げたホームラン　喜酔
風呂場まで子が告げにくるホームラン　はじめ
スタンドもシフトしいてるホームラン　天彦
ホームランそのままテレビの声になり　久仁於
ホームランあんなに打ったのに負けた　凡九郎
草野球叱られにゆくホームラン　胡頽子
王貞治フアンの夢は裏切らず　素身郎
身障の子と約束をしたホームラン　青丹子
泥んこが威張って帰るホームラン　里風
ホームランなどなく労も使も疲れ　洋々
ホームランでした男の子が生れ　洋々
人
コーヒーをこぼすテレビのホームラン　方大
地
ホームランに酔うて演出狂い出し　古方
天
雑兵の父が本塁打を狙い　洋々

軸
雨足がまばろしにするホームラン

夏

和田維久子選

舟遊び二人は夏に感謝する　勝一
初夏の風夢安らかな枕蚊張　彩平
夏夜市妻が無言で添うて来る　裕
身障の身に容赦なき熱帯夜　掬治
光年の星を語ろう夏の夜　本蔭棒
夏の海ビキニ姿が眩しくて　春日
夏風邪に馬鹿の見本と決められる　寿美
年甲斐もないこと想う夏の夜　登美也
一鉢の花枯れたまま夏盛り　洛酔
雨乞いの夏空今度は水浸し　秀峰
キラキラとはじいて海は夏の貌　一路
日盛りの夏場を稼ぐ蟻の列　代仕男
夏好きな夫は裸が好きだった　綾珠
原爆忌ああヒロシマに夏巡る　洋々
夏痩せをLLサイズに羨やまれ　満津子
一枝の夏を旅したカタツムリ　可住
ステテコが夏を気楽なものにする　隆子
愚痴一つ交えて日傘すれ違い　優

吟題課

じいさんの欠伸もらった夏のバス　文平
夏祭茅の輪くぐって暑気祓い　勝美
暁天法話山門を出る夏木立　規不風
ひと夏の付き合いつばめに軒を貸し　可保留
竹すだれ吊って明治に夏が来る　軒太楼
夏時間かえって夜長を持て余し　雅風
浜辺から夏が子供を呼びに来る　酔夢
老醜をサマーウェーに労われ　カズエ
野仏に笠をかぶせている盛夏　方大
色黒の息子を自慢したい夏　佳雲
砂浜に夏の女が翔んでいる道子　弘朗
シベリヤに残した人を想う夏　朗
上服もきっちり夏のお弔い　木魚
カンバスの裸婦へ水着のあとを描き　どんたく

佳

やはり夏過ぎたる春よ来る秋よ　凡九郎
夏やせと云って締められぬひと　里風
落ちそうな水着で夏を挑戦す　千代香
大量の鰻成仏させる夏　右近
蟬時雨禅の境地の乱れがち　宵明

人

半身不随の父に二度目の夏が来る　素身郎

地

ご近所が寄って涼んだのは昔　暁明

天

かぶと虫幸い夏を生き延びて　古方

軸

過去ゆるす想いがゆらぐ夏座敷

前列

久家 代仕男 選

前列に並んでうしろ向きたがり　多賀子
前列の背中を匍わすかぶと虫　本蔭棒
要注意前列に置き授業する　綾珠
欠伸もできぬ前列に坐らされ　素身郎
前列の居眠り話の腰を折り　方大
前列は教師のツバも浴びており　亭
前列へ並びやる気の意気を見せ　回天子
マジックショー前列に居てかり出され　実
前列の子が泣き出してきた落語　文平
前列の紅一点がよく目立ち　一路
前列にいずれ劣らぬボスの顔　大柏
仕掛人前列に置く実力者　佳雲
群衆の前列にいる仮面　規不風
前列でスト特訓の新社員　可保留
雑兵は最前列で叛旗振る　酔夢
前列に闘志むき出す顔が居る　洛酔
前列を盾に構えて怯まない　観洋
前列の顔に笑いが書いてない　雅風
司会者の声で前列埋められ　軒太楼
最前列今日は疲れたなと思う　文平
前列に恩師の写真褪せて出る　彩平
前列で亭主関白小さくなり　胡頬子
前列にわが子見つけた日のゆとり　里風
前列へ代理出席浅く掛け　カズエ
前列で頷いている目を閉じてゆう也
前列は頑固な父の指定席ひで
背く気の男前列から外れ　洋々
半生を前列ばかり見てくらし　義美
人ごみの最前列で買うサクラ　悠泉
花束が奇声あげてるかぶりつき　勝美
前列でバトンガールがはちきれる　どんたく
露払いという前列もおましたが　古方

佳

前列でデモる夫を淋しく見　文平
案の定前列に居る子を案じ　弘朗
前列に並ぶと多分笑う鬼　凡九郎
悲しみの重さの順にならぶ通夜　南奉
前列の猿に不信をためされる　可住

人

前列が一人足りない幼稚園　木魚

地

前列でやじって来いと握らされ　可住

天

自己欺瞞なけりゃ前列にはおれぬ　凡九郎

軸

前列に気勢そがれて口ごもる

▼暑中お見舞い申しあげます　―編集部

初歩教室

題 ― 白　紙 ―

本田恵二朗

発想（句材の発見）、叙法（描写の発見）、十七字音感（リズムの発見）、これらのことは誰でも百も承知のことであるが、作句上忘れてならぬことだから折にふれて再確認してみて欲しい。一に発見、二に発見、三にも発見ということを肝に銘じなければならぬ。発見のむつかしさ、苦しさがあってこそ作句の楽しさがあるのだ。自分なりの発見をすればよいのだが陳腐な発見ではいけない。ユニークな発見に努めねばならない。

先人の詠んだ句のパロディー（もじり句、模倣句）は発見と云えないことは当然である。柳友の皆さんが全力投球の意気込みで生んだ句を私に玩味させて頂き、私も一緒に勉強させて頂く所存である。葉書に五句連記して送って下さるよう望む。

どんなにも書ける白紙がこわくなり　美穂
子は白紙親の背中を写し育ち　同
（子は白紙母の背中を信じ切り）
さみしさは白紙に戻せぬ溝のこと　同
（白紙には戻せぬ溝の巾かなし）
時間来て遂に白紙で出す答案　峰雪
（時間切れ答案用紙白いまま）
理想の人なくて白紙の投票し　同
（白紙投票理想の候補見つからず）
もめた末白紙で委すこととなり　同
（もめた末白紙で委す敗北感）
古新聞白紙にされて陽の目見る　智津子
（古新聞白紙にされて二度勤め）
嫁姑の白紙に戻らぬ胸の中　同
（嫁姑今日も白紙に戻れない）
白紙に戻す理性の彼は流されず　千子
何も書けず辛さ白紙にあふれ出る　同
（ペン取れば辛さ白紙にあふれそう）
書いたような顔して出した答案紙　茂美
つらいけど白紙に戻す言葉選る　同
（くやしいが白紙に戻す言葉選る）
命名と白紙に書いて孫がふえ　未知
赤紙が白紙にしてもまだ想い　同
（赤紙を白紙にしても悔い残る）
汚れたら白紙に戻すむつかしさ　三和
（汚点一つもう白紙には戻れない）
デザイナー白紙を前に四苦八苦　静枝
漫画家の白紙は四次元世界まで　同
（漫画家の白紙は四次元までも飛び）
白紙には戻したもののにらみ合い　保夫
（白紙に戻したが肚がおさまらず）
白紙には戻すが役者まだうわ手　同
（白紙にはしたが役者が上だった）
過去清算白紙になって星を追う　句味地
（過去を捨て心白紙に星を追う）　同
白紙にもなれず示談の策を練る　三男
七彩の過去より白紙の未来追う　同
日記帖白紙がふえる恙無さ　紀久子
（日記帖白紙白紙で恙なし）
開票の白紙真面目か不真面目か　同
（真面目か不真面目か白票の心）
白紙には云いたいことがあり過ぎる　同
（云いたいことが山ほどもある白紙）
よこしまな恋は白紙に戻らない　昭治
（邪恋の花白紙になれず狂い咲く）
初孫の命名白紙へ手が弾む　なみ
白紙に向うと筆が慾を出し　同
（白紙に立ち向うと筆慾を出す）
新入社いつまで白紙でおれるやら　健司
今日は書こうあすは出そうと白いまま　同
さばさばとした気で白紙出しておき　房子
夢追って白紙に戻す走馬灯　同
推題を白紙委任でまるめられ　美世
神棚の白紙に亡父の影が揺れ　同
一票差白紙の票がうらめしく　大鷹
名場面白紙の巻紙読み終り　同
（堂々と白紙読み上げ名場面）
生かじりよりも白紙のほう好かれ　柳五郎
かんじんなところ白紙のメモ日記　同
白紙ですあなた委せの彩となり　貞子
悲喜こもごも白紙に包み義理果す　同
余生という白紙に夢をもりあげる　武太
横槍がはいって話また白紙　同
（横槍がささって話また白紙）
心境は白紙裁きを待つばかり　利美

（心境は白紙堂々と裁き待ち）　同　美佐
白紙還元あえて面子にこだわらず　同　静佳
白紙委任ばかりしている小株主　同　勝美
白紙ではおれず赤児も家の彩　同　テル
抜く力入れる力を知る白紙　同　胡頼子
一枚の白紙が心迷わせる　同　公乃
亡母の名を白紙に書いてみたい夜　同　小雅子
更生を誓う白紙だ汚すまい　同　可保留
真実が得たく白紙で初対面　同
マジックの夢を彩る白い紙　同
白紙には書けない彩を胸に秘め　同
白紙にも何か云い分ありそうで　同
何もかも白紙に戻す一周忌　同
嘘一つ白紙に戻す先入観　同
覚悟した辞表白紙へ手が震え　同
神棚は喪中白紙に封じ込め　同
（神棚を白紙で閉じる悲しい日）　同
遺言の重み白紙が黄に変り　同

和紙の白作り出す日の手の凍り　同　英子
過去を持つ女の白い日記帖　同　同
ときめきを秘めて白紙で逢いに行く　同
（ときめきを秘めて白紙の顔で逢い）　同
未来図の白紙に夢の色を塗る　佐代子
（未来図の白紙に夢の彩を選る）　同
企みがくすくす噛い出す白紙　幸
すすぼけた白紙が抱いている月日　同　芳枝
行商が白紙の噂染め換える　同
言い過ぎが白紙につけた淡いしみ　同
白紙には戻れぬ舟を夫と漕ぐ　同　露杖
白紙には戻したけれど無垢でない　同
一沫の不安も白紙委任状　同
閻魔への履歴白紙のままとする　同
新弟子の白紙が教える身にこわい　同　武水
夢だからよかった白紙の答案紙　同
世の波に白紙いつしか彩がつき　同　同　寿子
消してなお白紙は過去を連れ戻す　同

遮断機をおろせば白紙になる愛で　同
忘却へ白紙の鶴を折り続け　同　慶彦
半紙からはみ出しそうな子の習字　同
答案は白紙秒針は容赦せず　同
告訴した限り白紙に戻されず　同　誠一
どの彩を塗っても白紙には勝てず　同
人生へ白紙二枚は無いらしい　同　瓢太
明日という白紙へ描く彩がない　同
白紙委任したのがけちのつき初め　同
紙切りの鋏に白紙生きてくる　同
ご幣になり紙吹雪にもなる白紙　同

題―役目―　8月20日締切（十月号発表）

宛先　〒七一一
岡山県倉敷市下津井一―九―三四
本田恵二朗

盛夏

T.I

第三百四十九回（五十五年度第七回）

大萬川柳「やりくり」入選発表

選者　川村好郎

投句総数　三百八十四句

入選　六十九句

長崎　和子
あげ底のようなやりくり高がしれ

大洲　暁明
やりくって飛ばねばならぬ義理へ発つ

大阪　好一
やりくりの思案へ夜が短かすぎ

大阪　真砂
やりくりが解らぬ子等の高望み

和歌山　正博
やりくりに追われパートに流す汗

和歌山　紀久子
やりくりの連続でした母の皺

橋本　木魚
やりくりの手形ぼつぼつ廻って来

大阪　蘭
呑む時の金はどっかでやりくりし

和歌山　寿子
やりくりへボーナス既に消えている

箕面　一本杉
やりくりの果てサラ金のアリ地獄

堺　ひろ子
妻の里だけはやりくり伏せておく

富田林　花楢
やりくりがついて多弁になる夫

新宮　はじむ
やりくりの一足伸ばす市場篭

米子　未知
やりくりで建てたと見えぬ暮しぶり

和歌山　三男
腐っても鯛やりくりのつく老舗

米子　千代
ゆとりある素振りやりくり気付かず

米子　美佐
やりくりも少し覚えた新世帯

大阪　道子
やりくりの逢瀬に早い花時計

兵庫　左春
プレゼント姑はやりくり知っている

伊丹　武水
やりくりも限度シャモジを担ぎ出し

大阪　満津子
土壇場にきてやりくりのめどが立ち

堺　ひろ子
やりくりがどうにもつかぬ終電車

尼崎　千子
やりくりも愛すればこそ苦にならず

西宮　白宗
やりくりに触れず合格褒めてやり

奈良　カズエ
やりくりへ大高中のいるわが家

八尾　夕花
やりくりで夫の汗に応えてる

東大阪　没食子
方便の嘘やりくりについ混り

尾鷲　伊津志
やりくりに馴らされている子沢山

神戸　どんたく
火の車曳く痩せ馬の老いの坂

大田　軒太楼
やりくりを表に出さぬたばね髪

京都　桐下
やりくりを背負う働き蜂の日々

奈良　本蔭棒
やりくりの手腕見惚れる額の母

鳥取　洋々
やりくりに触れず嫁がす晴着買う

島根　夢酔
やりくりのへそくり物価が持って逃げ

大阪　武太
やりくりで来た坂道はふりむかぬ

東大阪　美子
やりくりへ報われました子等の地位

大阪　清女
やりくりへ社長重たい朝を出る

藤井寺　吸江
友達に借り友達に貸してやり

奈良　保夫
やりくりも苦にせずあした へ星を抱く

実家の老母だけがやりくり知っている

やりくりの妻に感謝が言い出せず

堺　一二三
日めくりをやりくりつかぬ手でむしり

やりくりのもてなしと知る舌づつみ

兵庫　ゆう也
やりくりでささやかなゆとり夫婦旅

やりくりの円周家族が駈けている

寝屋川　あいき
やりくり世帯だのに夫は世話好きで

やりくりが上手で夫の楯になり

和歌山　佐代子
ささやかなやりくりの膳灯が温い

長男にやりくりそっとのぞかせる

寝屋川　度
やりくりはうまいが展望もたぬ妻

我が家のやりくり赤鉛筆も考える

大阪　寿幸
女房のやりくりうれしい預金帖

やりくりの尻を実家に持ち込まれ

米子　雄々
やりくりがすぎてしぶちんとも言われ

不夜城のネオンやりくりなど見せず

倉敷　里風

やりくりへ嘘も巧になりました
やりくりの切符終着へ来てしまい
佳　句
和歌山　公　子
逢いにいくためのやりくりなら出来る
富田林　花　梢
やりくりの涙が変るもらい泣き
大　阪　秀　村
億のつく金をやりくる選挙戦
守　口　右　近
やりくりは大臣もする国予算
福　山　静　子
月給の中のやりくり愚痴るまい
堺　千万子
やりくりに触れず晩酌ついでくれ
人ノ句
米　子　瑞　枝
やりくりの吐息長女だけが知る
地ノ句
和歌山　頼　次
やりくりが夫婦の絆太くする
天ノ句
米　子　伊　都
やりくりで乗り切る妻へ歩を合せ
選　者　吟
やりくりをしてきたデートなお楽し

昭和五十五年度

ベストテン（六月現在）

一	**雄々**	一〇、〇	米子
二	**花梢**	一〇、〇	富田林
三	**寿子**	九、五	和歌山
四	**右近**	八、五	守口
五	**夕花**	八、〇	八尾
六	**道子**	八、〇	大阪
七	**度**	八、〇	寝屋川
八	**頼次**	八、〇	和歌山
九	**好一**	八、〇	大阪
一〇	**一二三**	八、〇	堺
一一	武雄	八、〇	和歌山
一二	吐来	八、〇	羽曳野
一三	白宗	七、五	西宮
一四	弘生	七、五	大阪
一五	和子	六、五	和歌山
一六	方大	六、五	倉敷

以下略

昭和五十五年度第九回

「甘い」　三句以内

締切　八月二十五日

第十回

「ほどほど」三句以内

締切　九月二十五日

投句先

〒593　堺市堀上緑町一―三―七

藤井一二三方　**大萬川柳係**

・柳界展望・

▼6月22日の第4回全日本川柳大会に欠席された中島生々庵理事長の安否を気づかった各地の方々へ—病気ではなく足腰がやや弱り駅の長いプラットフォームや階段の昇降に疲れをおぼえ、そのための欠席。ご心配をかけました。

▼大会は三百名を越す盛会、さすが川柳王国岡山の面目躍如。（P39に関連記事）

▼七月七日の路郎忌および薫風氏の東洋樹賞受賞記念句会は九十余名のご出席で賑わった。番傘との選者交流、岸本吟一主幹という大きな魅力、薫風氏の巾広い交友。多久志氏の贈呈本と重なっての盛会だった。（カットは薫風氏—カメラ岳人氏）

▼時の川柳社の新主幹に小松原爽介氏が就任された。三条東洋樹氏の体調がおもわしくないとのこと。なお東洋樹氏は会長としてのこられる公算が強い。

▼第11回川上三太郎賞は該当作家なし。準川上三太郎賞作家は「一花供えて冬の仏と巡り合う—他四篇—浜田玲郎」同「歯車に見えない罠がある真昼—他四篇—荻原鹿声」同「銀婚の歴史カルテを積み上げる—他四篇—庄子喜一」—第6回白石朝太郎賞作家は「尻尾だけこりこりしているお人好し—他三篇—吉田甚吾朗」（柳都七月号から）

▼野口北羊句碑供養並びに岐阜県芸術奨励賞受賞記念句会が10月12日（日）午前10時から岐阜市古津・古津苑で開催。題／見栄坊・持ち味・夫・活字・夏姿・鮎・事前投句／賞／（投句拝辞）風流譚・東野大八—主催・岐阜川柳社。

▼延永忠美句碑建立。（川柳岡山社副主幹）句碑建立地は岡山市吉備津神社。句碑除幕式は11月24日。募金目標額金三十万円。一口金一千円（参加者に忠美句碑記念写真を贈る）送金先〒701—42岡山県邑久郡邑久町山手一四四五、川柳岡山社内延永忠美句碑建設委員会・代表大森風来子。（振替口座岡山八八五二番）

▼6月15日、やまと番傘30周年記念川柳大会が三輪明神大神神社で開催。二百十八名参加、本社から小松園・凡九郎・酔々・鬼遊諸氏が出席。

▼第24集国鉄川柳句集（55年版）序文小林由多香（本社同人）二九三名参加、本社同人諸氏の雅号もならぶ。頒価一千円、送料三百円。発行所全国鉄川柳人連盟・〒689—11鳥取市東路六四、両川洋々

▼噴煙六月号は三十周年記念号とあって104ページ。故大嶋濤明氏の偉大さを語る記事、俳人との対談など好読み物がそろう。

▽同人の動向△

▼若本多久志氏（西宮市）は七月七日の句会当日、贈呈の「新しい国語の書き表し方—角川書店編」を西宮からタクシーで運んでくださった。ご自分で運転されること避けておられるようである。

▼川村好郎氏（高石市）は7月3日NHKテレビ「おはよう広場」の浴衣について「湯上りの妻の浴衣もさすが年—好郎」を電話依頼で即吟が放映された。

▼戸田古方氏（川西市）が6月30日に大阪府立成人病センターへ入院された。咽喉の調子がわるいとのことご全快の一日も早かれと祈ります。

▼河村日満氏（鳥取市）が7月7日付の日本海新聞に「第四回川柳大賞の選考を終えて」を執筆された。

たいしようの会

鳥本泰
樫谷寿馬
高杉鬼遊
室田千尋
越智禎
寺尾俊平
光森良
森本夷一郎
岩井三窓
中尾藻介
橘高薫風

「前略—今年は、どこで手違いがあったのか、各選者からの特選作品の提出が遅れたらしく、第一部の投句分「芸」「輪」「山」の入選作品が発表されてあとで、大賞作品を選考することとなった。こんなことから、特選作品の作者呼名は、この作品に限って呼名禁止となった。など選考委員十五人があれこれで発表時間に迫まれた」—昨年の大賞作

品と違って今年の大賞はケンケンガクガクの論議は必要なかったのかも知れない。とある。

▼橘高薫風氏（豊中市）は六月から創設された「朝日なにわ柳壇」の好調の波に乗って「この一句」を毎日推薦して好評。片岡つとむ氏と一ヵ月交代で紙面を賑わすことになった。七月十三日開催の第34回青森県川柳大会へ講演と選評のため出席するなどプロ並みの忙しさである。

▼西田柳宏子氏（大阪市）から―城一舟遺句集「ひとすじ」の出版に遺族、親戚の方々から感謝されました。

▼佐伯越子さん（米子市）は全日本川柳大会に大会賞を獲得され、六月末日来社されたが、一三夫氏も葉子さんもお会い出来なかった。（入選句はP39に）

▼前号水煙抄秀句鑑賞P31の四句目は武田照子と訂正。

▽旅　信△

▼浜田久米雄氏（岡山県）から―国鉄和倉大会の寄せ書拝受。

▼鈴木可香氏（名古屋市）―北上吟社三百号記念岩手県川柳大会から寄せ書拝受。

▼米沢暁明氏（大洲市）大洲神社から寄せ書き拝受。

▼黒川紫香・正本水客氏から―上州法師温泉と東京からお便りをいただく。

▽8月の句会△

▼**菜の花句会**は十日（日）夕六時から西郷会館（八尾神社境内）近鉄大阪線八尾下車西南歩約三分、幸福相互銀行ウラ。会費・三〇〇円。兼題及び選者・雫（西尾栞）興奮（高杉鬼遊）探す（未定）海底（未定）。席題・二題（兼題とも各題三句以内）投句・各一句毎適当な句箋に記入。裏面に雅号記名、郵券百円同封。〆切は前日到着分限り。投句先〒581八尾市高安町北一丁目二五大路美幸宛。

▼**南大阪川柳会**は21日午後六時から―松崎町三丁目大萬で開催。題―呼吸・弱腰・ゲスト・風船。

▼**南海川柳部句会**は二十一日六時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は―遠回し・誘い水・空似。

▼**東大阪川柳同好会**は二十三日六時から東大阪市民会館2F（近鉄永和駅下車）で開催。題は―割勘・魔女・海外旅行・対話―席題二題当日発表。

▼**暑中お見舞い申しあげます。**

新同人紹介

神原柏秋（かんばらはくしゅう）
―紅月・岳詩・客遊子・推薦

大道美乙女（おおみちみつよ）
―小松園・栞・推薦

中村優（なかむらゆう）
―好郎・花梢・推薦

川柳塔社55年度同人総会

松江市で開催！

とき　55年9月27日・3時　同人総会

ところ　松江温泉・神の湯

句会　4時30分

柳話　川柳塔社副理事長　川村好郎
川柳わかやま代表　野村太茂津選
島根県川柳作家協会会長　河村日満選
いずも川柳会会長　尼緑之助選

兼題「橋」「活作り」
川柳塔社副主幹　西尾栞選
川柳塔社同人　宮西弥生選
「漁火」「縁結び」「出雲弁」
（席題なし・各題三句以内）投句拝辞

会費　五百円（同人でなくとも句会へご出席ください）

懇親宴　二千円（六時からです。どなたでもご参加ください）

解散　七時三十分

宿泊料　六千円

市内観光―二十八日―小泉八雲旧居―松江城―風土記の丘―足立美術館など。

▼**関西方面の窓口**―〒584富田林市北大伴二〇八板尾岳人。〒581八尾市中田二―三〇二高杉鬼遊。（**申込み締切8月末日**）

川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町田中

山内静水方

高橋鬼焼
槇田英詩
時広一路
森井菁居
三宅不朽
小島蘭幸
古谷節夫
古田鈍舟
古田寛子
岩本文晴
岩本笑子
山田スミ子
山内静水
山内房子
ほか一同

みかん

川柳しんぐう吟社

10周年記念

ふるさとは青くなければならぬ海

川柳わかやま吟社

第16回路郎忌と

橘高薫風氏東洋樹賞受賞記念句会

七月七日午後六時
会場・金属会館

梅雨空の悪天候だったが、路郎忌とあって番傘の岸本吟一主幹をはじめ番傘の方々が友情出席。また薫風氏を祝って川柳岡山社の寺尾俊平氏、時の川柳の新主幹小松原爽介氏ほか多くの方々が駈けつけてくださった。

常任理事有志から薫風氏に金一封、与呂志さんが代表して贈呈。

若本多久志氏が、誤字や送りがなに注意をしてほしいと、「新しい国語の書き表し方—角川書店編」を出席者に贈呈されたが数が足りず、入手出来なかった方は本社へご一報いただけばつぎの句会でおわたしいたします。

生々庵主幹の柳話は切々と師をしのび、師弟の情を吐露され、薫風氏の川柳への情熱を高く評価、日本の薫風に成長するよう激励された。

正面右横には路郎師の胸像と「俺に似よ」の掛け軸が会場の目を惹く。

七月の月間賞杯は、岩本雀踊子氏にかがやいた。

受付—与呂志・文秋・天笑
—進行・西田柳宏子—記録・高杉鬼遊
出席—多久志・与呂志・翠光・一三夫・薫風・文秋・雅風・紫香・勝美・川狂子・滋雀・潮花・としよ・天笑・新之助・育園・アキラ・重人・千万子・瓢太・水客・右近・頂留子・綾珠・糸葉・トメ子・邦晴・規不風・桐下・小路・弥山人・生々庵・作二郎・俊平・冬二・恵美子・太茂津・きみ・英子・喜風・三十四・夕花・山久・憲祐・満津子・道子・度・酔々・吟一・柳宏子・君子・あいき・智子・恭太・信治・一高・花梢・美代・敏・喜代志・芳川・湖風・爽介・茂子・鬼遊・千代三・美乙女・洋敏・いさむ・岳人・涼一・健司・好郎・善紫・彤水・寿子・幸生・雀踊子・恒明・みずほ・柳柚・柳伸・たつお・弥生・左久良・月子・鎮彦・凡九郎・栞・萬的・史好・小松園・庸佑・美幸・葉子。

席題「女優」　森中恵美子選

わが家にも女優の卵一人いる　鬼遊
議員誕生千夏の胸の全国区　憲祐
汚れ役見事に演じカムバック　月子
少し売れて女優忘れた母の唄　信治
一番自分を忘れた時が女優です　凡九郎
戦争があると女優は泣きたがる　美幸
女優志願上野の駅で罠に落ち　千代三
モンロー忌はるかな夢を追う男　たつお
禁断の実を食べて大きくなる女優　夕花
外車もつ女優はスキャンダルに勝つ　いさむ
死の予告感じ舞台の大女優　規不風
山本安英いま夕鶴になる化粧　邦晴
大部屋で一線越える覚悟する　重人
女優と言う女を覗く万華鏡　雀踊子
森繁と組んで女優に運が向き　左久良
清潔な女優でオートバイが好き　萬的
三枚目が適役と言う女優　善紫
女優から話は聞かぬ方がよい　美幸
阪神ファンで女優の名が売れる　酔々
ケラケラと笑う女優に泣かされる　太茂津
昔話の好きな端役の女優たち　俊平
女優は不幸であるべしという女優あり　吟一
風の日は風に溺れてみる女優　冬二
チェホフが好きな女優とコーヒーと　アキラ
八重子以後白鷺をみる興はなし　俊平
いさぎよく脱げる女優を汚すまい　弥生
そう言えば消えた女優に風渡る　美代
メロン掬うとき女優だなと思う　水客
女優いまカルメンの汗拭いている　作二郎
八重子ゆき天津が逝って風かわく　水客
足もとが盲になってゆく女優　天笑

白百合の白より白く女優去る　桐下
真夜中の女優は母へ電話する　岳人
ドサ回り終の住家のない女優　喜代志
デートリッヒの脚が神話の中にある　たつお
深刻な女優でうなずきが多い　俊平
演技とは漬物石を持つ女優　酔々
女優から妻へ痛みはなかったか　冬二
わがままな女優に波が高すぎる　湖風
売れぬ女優のてのひらにある傷み止め　恵美子

席題「王子」　**小松原 爽介 選**

王子気取りでお子様ランチの城崩す　喜代志
酔いざめの水のうまさを知る王子　酔々
恋すると王子戦う人になる　紫香
気付かれぬように王子は孤に耐える　翠光
ネギ坊主星の王子に負けられぬ　夕花
ガラスの靴いつも王子の胸にある　滋雀
恋に生きる王子に勲章などいらぬ　雀踊子
がまんする王子鞍から落ちました　俊平
暗剣殺王子のままで今終る　美幸
十二時の時計を止めたくなる王子　糸葉
肩のこり孤独に耐えている王子　与呂志
替え玉の王子の涙うなる　規不風
服をとり替えた王子の物語り　恵美子
王子さんに聞かす童話は鬼が出る　凡九郎
病んでいる王子は城で詩を作る　美乙女
正論を通す王子がいて揉める　水客
王子いつしか太陽の色見失ない　萬的
もの思う王子に髭が伸びてくる　恵美子
王子にも母の美しさが分り　水客
城を出た王子犬笛吹いていた　桐下
ジョーカーを持っている間が王子さま　喜代志
箱入りの王子に四季はめぐるのみ　天笑
王子さま仮面が欲しい時もある　恒明
泣くときは独りと知った王子さま　吟一
落馬してひとりぼっちになる王子　冬二
王子さま手ぶらのいいわけなどしない　千万子
王子誕生魔女に一度はのぞかれる　アキラ
タンポポのわたげを追わぬ王子様　糸葉
王子にも引き金をひく意地がある　重人
王子さま花の散りぎわ知ってるか　爽介

兼題「ひと時」　**河内 天笑 選**

ハイヒール買うひと時の女の眼　萬的
待たして置いてそのひと時をコンパクト　としよ
ひと時の気まま許さぬ風見鶏　重人
商用のひと時比良の山煙る　美代
どしゃ降りがひと時過去を巻き戻し　好郎
口づけのひと時天も地も見えず　千代三
名人のひと時ひげを抜いている　多久志
やりくりが済んだひと時ごろ寝する　いさむ
ひと時の逃避画廊で美にふれる　度
ひと時の晴れ間へおむつを高く干す　冬二
ひと時は受胎告知に溺れよう　多久志
ひと時の辛抱遺産貰うまで　好郎
決断のひと時私が二人居る　俊平
ややこしい話ひと時忘れよう　頂留子
ひと時の憩も母の手は動き　鬼遊
人妻のひと時ゆれる花のいろ　三十四
縄のれんひと時社長呼び捨てる　鬼遊
札束へひと時悪い夢を見る　健司
移り香がいとしひと時抱きしめる　美乙女
ボーナスでひと時中流意識湧く　新之助
ひと時がこんなに長い花時計　勝美
致死量とひと時遊ぶ指の先　千万子
ひと時の真空があり出棺す　みずほ
ひと時をむなしく過す自由かも　柳柚
ひと時は花のこころで花を買う　冬二
鰯雲ひと時空虚満たされる　美代
ひと時の雲の流れが過去になる　与呂志
グラスかちりこのひと時を大切に　恭太
妻の饒舌ふせぐひと時無言なり　鬼遊
人間の檻をひと時猿のぞく　育園

第16回水府忌川柳句会

日時　昭和55年8月6日（水）18時
会場　東区東ノ宮中央一丁目17－5
国鉄大阪環状線・地下鉄中央線
森の宮駅すぐ（日生球場東隣）
大阪市労働会館
話　父としての水府　岸本 吟一
父　岩井 三窓 選
説　礒野いさむ 選
真似　去来川巨城 選
流れ　中島生々庵 選
充実　平賀 紅寿 選
ほかに席題1題　各3句
会費　三百円　締切19時
主催　番傘川柳本社

ひと時を悪女になれる炊飯器　憲祐
ひと時を空しい愛の中にいる　花楢
馬鹿になるひと時おでん盛り合わす　恭太
ひと時の安らぎ麻酔効いている　邦晴
ひと時の珈琲でバネが甦える　みずほ
梅雨の晴れ間に言っておかねばならぬこと　恵美子
ひと時を男の嘘に酔ったふり　糸葉
紫陽花に佇つひと時の物思い　一高
予定にはないひと時を逢うている　智子
ひと時の人生かなと天の川　みずほ
ひと時の痛みに神様お呼びする　糸葉
ひと時も女は女に油断せぬ　弥生
ひと時の温み焼芋から貰い　邦晴
軍歌ひと時中年は鳥になる　俊平
午後の妻ひと時空想の中に棲み　月子
乾杯のひと時やはり影がある　爽介
ひと時を泣けばケロリとする女　紫香
授乳するひと時も海女海を見る　右近
猫だいてひと時流れの外に居る　千万子
まじりけのないひと時を石と居る　天笑

兼題「民」　黒川紫香選

民宿の主人がくれた人間味　英子
御民われ勲章やはり大切に　アキラ
民の声揃えば物価高を言う　小松園
幾度かいろりは民話聞かされる　文秋
選挙権だけしか持たぬ庶民です　多久志
ふるさとの民話をいつもふところに　酔々
一億民一億の道を行く　文秋
献血の椅子にひとりの民として　智子
民芸に生きる老婆の数え唄　君子

いつの世も民百姓はお人好し　恭太
難民の子に限りなく雨が降る　作二郎
民族のちがいで五輪ボイコット　月子
結集した民の力を知らされる　庸佑
善良な民CMにだまされる　恭太
市民税払いもせずに文句言う　あいき
民衆と呼ばれ野次馬とも呼ばれ　邦晴
遊牧の民に祈りの陽が沈む　滋雀
民宿のよさは頼めば芋の粥　小路
梅漬けて日本の民話育てる　美代
民話のなかに深い恨みがこめてある　水客
電化した民のカマドにないけむり　幸生
ざわざわと民は動いているばかり　アキラ
人里を離れて民話生きている　洋敏
天皇が民に溶けこむ帽子振る　一三夫
民草と言われた頃の嘘に馴れ　水客
銭湯でストレス流し合う庶民　満津子
欺され続けた国民に牙がない　一高
恐ろしや万民歩調揃える日　みずほ
森に棲む民話に鈴が生きている　弥生
臣民と書いて人間誇りもつ　芳川
民法を読んでる妻が他人めき　月子
二重橋やっぱり民として拝む　桐下
民法に裁かれた日の軽い罪　寿子
飛ばせてもしゃぼん玉しかない民の声　頂留子
難民の顔敗戦の日を想う　紫香

兼題「鶴」　岸本吟一選

生涯に一羽の鶴を描いて死ぬ　冬二
汚れた手で栖鳳の鶴を懸け　左久良
望遠レンズ瀟洒な鶴の眼と出逢い　紫香
首しゃんと鶴は仁義をわきまえる　薫風
鶴折って女の業の一つずつ　小松園
夕鶴のイメージ安英機を織る　邦晴
鶴を折る少女の指は透きとおる　美乙女
人聞が恐くて鶴はもうこない　美幸
亡母を飾った鶴の鏡掛け　桐下
飛ぶときの鶴は祈りを持っている　君子
鶴の首少女は鋭く折ってゆく　新之助
霧の村ぐるりと鶴の恩返し　アキラ
望郷の庭に鶴置く老移民　恭太
ヒロシマの怨みを抱いて翔べぬ鶴　一商
ツルを折る少女に青い海がある　花楢
お祈りがふかくて翔べぬ千羽鶴　喜代志

55年度 川柳塔社二賞発表句会

日時　昭和55年10月7日(火) 六時から
会場　金属会館
柳話　中島生々庵
路郎賞・川柳塔賞
表彰　橘高薫風選
兼題　「枕」　菊沢小松園選
「じっくり」
「巻き返し」　川村好郎選
「ゆとり」　西尾栞選
席題　(二題・当日発表)
会費　三百円
(懇親宴はいたしません)

主催　川柳塔社

鶴病みきかの子のペンも白くなる　君子
鶴の首哀しい過去を語り出す　月子
恩返し鶴の影絵は羽根を抜く　水客
六月の鶴は喜劇が好きらしい　作二郎
丹頂の翔ぶ日離郷を決意する　たつお
鶴千羽寄っても武装などしない　一三夫
なぐさめにならない歌をうたう鶴　育園
折鶴の一つ一つが梅雨に入る　酔々
雪女の涙を鶴はきっと見た　湖風
鶴が舞う夢を真昼に見る男　史好
鶴の羽根幾枚ありし恩返し　いさむ
僕だけの鶴を創りに旅に出る　柳杣
身のうちの鶴を放ちて昇天す　智子
絵の鶴とおとこはすぐに恋をする　冬二
鶴が翔ぶそして乳房は二つある　恵美子
唯物論かくてかくてと鶴あるく　俊平
人は人を信じることだ鶴の檻　冬二
ときとして男の胸を鶴が舞う　吟一

兼題「駅」　**橘高薫風選**

終着がまた出発の駅となり　寿子
嬉しい時も悲しい時も通る駅　天笑
駅から十分を妻のハンドルで　恒明
ホルモンが匂うて駅の近さ知る　一三夫
駅まえで頑固を守る平家建て　茂子
駅で待て但し出口を間違えな　善紫
世を捨てた顔して駅の清掃夫　右近
凡父で終るか駅で買うスポーツ紙　爽介
アメリカへ来たかと思う駅になり　千代三
わが胸のアルバムにある小さな駅　満津子
駅に来てやっとさりげない顔　生々庵
駅一つ乗り過ごしてから気が変り　与呂志
新婚の発った駅から都落ち　幸生
駅の名に惹かれて降りるひとり旅　天笑
鳩の胸の汚れを思う駅に降り　恵美子
むし暑く他人の別れを歌でみる　喜代志
逃亡の胸に駅の灯ひとつずつ　君子
終着駅番狂わせが待っている　天笑
馳け落ちの駅浄瑠璃の唄がある　涼一
夏だけの臨時駅にはドラマがある　いさむ
恋人がいない駅のひろさかな　美代
駅前はこの頃アサ寝ヨイ寝する　花梢
海紅樹咲けば必ず帰る駅　太茂津
二条駅燕ひるがえりひるがえり　栞
駅弁ひらくみんな他人だなと思う　爽介
無人駅音みな乗せて発車する　アキラ
改札を手錠が通っただけの風　新之助
フラミンゴみたいに駅へ友だちと　俊平
バンザイで送られる駅倖せか　鬼遊
駅のベンチでビタミンをのむ男たち　水客
しのび逢い駅のホームが広すぎる　好郎
人質にどの駅もみな灯をともす　冬二
少年の励みは駅の大時計　史好
やぶり捨てたカレンダーに私の駅がある　凡九郎
駅長の帽子の中の時刻表　岳人
大統領到着喜劇になる駅で　弥生
クロバーの生えてる駅で汽車を待つ　トメ子
見送りのない駅一本気を通す　信治
ヒロシマの駅では影を継ぎ合わす　作二郎
時刻表回り舞台が駅にある　雀踊子
赤い駅青い駅あり人生に　薫風

（河井庸佑・整理）

茗人忌川柳大会

とき　**昭和55年8月24日**（日）午前10時
ところ　鳥取市駅南「鳥取工業福祉会館」
柳話　菊沢小松園　氏
兼題　「先生」　西尾　栞選
「笛」　川村好郎選
「割箸」　岩本雀踊子選
「透ける」　河村日満選
「ジーパン」　小西雄々選
「使い捨て」　小林由多香選
席題　当日二題　各題三句以内
会費　二千五百円（懇親宴・作品集呈）
投句料　五百円（作品集呈）
投句のみの方は**8月10日**までに着くよう鳥取市相生町三丁目二〇四　森田熊生宛お送り下さい。

うみなり川柳会

▼8月23日（土）大阪弁天町発　12時半（日交バス）岩井温泉（明石家旅館）17時着一泊。**8月24日**（日）茗人忌川柳大会参加。17時鳥取発、阪急大阪着20時—費用交通費宿泊料共一万五千円。

新同人になって

竹内紫錆

満員車通勤で、タイムレコーダーを押す身になりました。七十歳までの職があるというと羨む方もおります。

仕事は英文↑和文、独文↓和文の校閲です。技術論文が対象なので中に論理の誤りがあれば直す、ということです。詩や文芸の世界と異りますが、それでも科学随筆の素材を極力拾うつもりです。

話は変りますが、大阪付近の川柳作家何千人かの中で、サラリーマン、職工（技術者）といった人は何%ぐらいでしょうか。日本人の人口の中では、満員電車の状況からみて相当高率であるようです。しかし、投句の実績からみますと、技術者的発想は選者の理解の外らしいと想像することがよくあります。一方、女流作家が、機械に弱いことはわかりますし、その結果、万人向きのテーマをデリケートに変化づけしている手法が、選者にも判り易いらしいなという風に解釈もします。ただ私は、テレビ以後の機械も生活に滲透し、それを扱う人間の気持に川柳味が醸し出される時期が必ずあると思っています。研究開発の科学者としては、句にする時期が早すぎず、遅すぎず、が大切かと心得ます。

句でなく、論理的な文章の形になる時期の最も早いのが「特許」です。この世界では類想を片っぱしから排除する精神が各企業で一杯です。十ページの特許申請書類でも利潤を独占されてはかなわぬという気持で、二番煎じのにおいがしたら直ぐ異議申立てを行ってつぶしにかかります。この厳しさを川柳に当てはめ、選者が厳選したら毎月の柳誌が作れないほど薄いものとなりましょう。といって先例のごく少い句を作るのに難解句を以てするのは私は反対です。選者も解らないなりに作者の顔を立てるのは困ります。私は、句材が選者になじみがないという理由で没にされるのはいやですが、とにかく新発見のものを出したいと思います。しばしば見かける「母もの」、「孫もの」は食傷ぎみ、新聞のコラム、社説、評論などに既載の内容を十七音に仕立てたものも類想であり、後願の特許のようなものと思っています。

以上、ハガキでご返事しようと思って書き出して長くなりました。同人になりましたら電話代りのメモのやりとりをしたく思いますのでよろしく。科学系の仕事をなさっているらしい香川酔々、阿萬萬的様らの住所が知りたいのです。（工学博士）

今は亡き摩天郎氏

福田丁路

八木摩天郎氏突然の御逝去、残念でなりません。氏とのお付合いは、氏が「川柳雑誌」昭和二十八年二月号に書いていられるように私が大阪府庁、氏が堺市役所勤務時代ですから、実に五十年に及ぶ次第です。先日も電話で堺の名所、旧蹟を案内していただく約束をしていた事でもあり、その悲しみは筆舌につくし得ません。早速参上すべきところ、些か身体の調子を損ね、去る十二日、八木家を訪れ、御霊前にぬかずき御冥福をお祈りいたしました。そして氏の長い御芳情に報いるため怠っている川柳に精進することを誓いました。

五月十六日

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

どんぐり川柳会　谷垣　史好報

きっかけを待つ両方にながい夜　柳　伸
真剣に聞いているのに落ちがつき　好　郎
真剣の話に母は茶を点てる　吸　江
真ん中の家は両方に耳がある　岳　人
盧遮那仏跌座千年のまるい膝　憲　祐
花子から千代から愛を告げにくる　千代三
叱らない父の真剣恐くなる　弥　生
真剣な顔で食べてるにぎり鮨　酔々
真剣な尺取り虫の早さかな　鎮　彦
政治家が真剣になる金のつる　鬼　遊
怠け者を真剣にさす馬は駈け　雅　風
真剣な子の目で母の苦労見る　真　砂
双方に言い分がある流れ星　小松園
真剣な顔してお爺ちゃんウンコ　瓢　太
真剣になる視界が狭くなる　勝　美
真剣な石　名人が受ける音　薫　風
両方の意地が線路を歩かせる　一二三
椅子よりも畳が好きな祖母のひざ　サ　ヨ
両方が同じ間違いしたらしい　柳　仙
真剣な眼なざし夜の眉をひく　美乙女

いずも川柳会　板垣　草丘報

雑談の合間大事を思い出し　緑之助
正直に百円分の肩をもむ　三　和
温泉の湯気にストレスほぐされる　夢　酔
肩の荷をおろせば翔べるはずなのに　芙佐子
雑談の中でも本音を匂わせる　登美也
六十路まだストレス解消朝を駈け　栄
作戦が妻にあえなく見破られ　耕　草
作戦を逆手とられる悔もあり　多賀子
他人事でない雑談に聞く噂　可保留
肩に荷を乗せて素知らぬ父で生き　芳　枝
肩もったばかりに妻ににらまれる　早　苗
山の宿意外同志の鉢合せ　独　仙
補聴器の祖母が意外な事を知り　軒太楼
あまりにも意外眼鏡ふきなおす　正　朗
意外なことねとほのめかす嫉妬　芳　子
作戦は通じなかった愛のカベ　文　子
小心な男意外な大芝居　みのる
資源飢餓ストレスだけが貯る国　遁　児
口笛を吹けば意外な人が見え　九二老
作戦を変えられ入知恵慌てだし　はじめ

川柳塔まつえ　恒松　町紅報

ひと時を石につぶやく詩をもち　早　苗
戦記読むひと時兵の身にかえる　鉄花人
干し終えたひと時雲と対話する　美　世
多忙でも趣味のひと時もつ暮し　愚　童
ひと時の別れを惜しむ国訛り　栄
ひと時の感情ころし紳士ぶる　三　和
駅で待つ約束女が泣いている　寿美子
遠ざかる駅いつまでも母が立ち　美　佐
幸福という駅で切符のよく売れる　雪　美
無人駅誰のこころか四季の花　千　代
駅前の広場に街の素顔みえ　伊　都
悪友の巻き添え梯子酒となり　巡　歩
宴会の巻添え音痴唄う羽目　みのる
アメリカの巻添え油カットされ　登美也
巻添えの盗難品と知らず買い　舞　吉
巻添えにして罪障を人に着せ　梟　人
呼び捨てにできぬ気性で打ちとけず　登　志
呼び捨てにして止り木で呑んでいる　鶴　丸
呼び捨てにされて加害者記事になり　快　哉
呼び捨てにして評論家楽しがる　孤呂二
元総理に尊称がなし被告席　遁　児
故里は呼び捨てにする友がいる　町　紅

川柳たけはら　森井　菁居報

気の毒なお人と思う地獄耳　静　水
お世話する夫に弱音はいとれず　房　子
いつまでも入門書だけ読んでいる　鈍　舟
スランプという一言で逃げている　寛　子
庭のすみ生きているぞと露のとう　節　夫
春が好き竹の子が好き祖母が好き　靖　子
灯を消せば灯を恋い点せば闇を恋い　不　朽
夕桜子を肩車して帰る　蘭　幸
勝ち負けは抜きで見給え空の青　菁　居
制服を着たら若々しい父だ　中二愛
あたたかいお言葉胸で生きつづけ　貞　子
いいことがありそう茶柱しゃんと立ち　敬　子
無人駅ローカル線の吐息聞く　一　路
鉄塔よ海の眠りをさませるか　鬼　焼
難聴の幸雑音を聞かず済み　シゲヨ
同情に解剖刀は任されぬ　酉　合
いい言葉たくさん聞いた嬉しい日　かつ子

かなしい酒をたずおもう無職かな　かつこ
立つ鳥は後を濁さぬ仕事する　英詩
紀ちゃんをスターにさせる花畑　小五紀
コンパクト閉じて女の射程距離　正子

川柳わかやま　堀端三男報

ぶらり出て行く当のない焦り　光代
又かとも言わずに母が穴埋める　緑楼
古里は青くなければならぬ海　太茂津
誘惑に負けそう母へ手紙書く　としよ
青いから千切ってみたい果実かも　誠一
米減らす畦でしょんぼり青蛙　きみ
青空に恥じない野良着の肩をはる　三千代
口下手な奴が手紙の名調子　頼次
白鳥が浮かべば青い湖になる　はじむ
忘れずに忘れた頃に来る手紙　佐代子
行間ににじむ詫りの国言葉　佐知子
便箋は一枚ぎりの固い意志　和子
善人に戻った顔が青ざめる　紀久子
大物のぶらりを記者は見逃がさず　与史
母さんの手紙がおやつにそえてある　幸代
いつまでも膝に置きたい母の文　寿美数
コンクリートのあい間青空久しぶり　天彦
香水を添えて別れの手紙くる　英子
初恋の思い出青いまま残り　三男
葉桜へぶらり出てみる病みあがり　登紀夫

川柳大阪　西岡洛酔報

真心が仇で返って来た仕打ち　秀峰
唄や絵のようには行かぬ増位山　君枝
新入社まだぎこちない定期券　敏
俥を求める靴のちびたまま　洛酔
定刻になれば無職も腹が減り　本蔭棒

嘘のない子供心の恐しさ　与呂志
定年で仲間も他人となる恐さ　希久志
勲章は無くても定年夢を抱き　喜酔
喝采もなく定年へ押し出され　真佐志
定年がノンストップで来たあせり　六龍子
定年という残酷な列がある　天樹
定年だ明日から朝寝出来るぞよ　三十四
定年へ二人三脚妻も老い　雅巣
喰い道楽器の心知っている　道子
道楽が男冥利のままで死に　笑風
道楽へ伸ばしたままの手が抜けず　甫久路
ささやかな道楽余生に幅がある　比呂志
道楽と云えぬ人生五十年　喜洸
みんなして福祉に託す平和の手　吉峰

南大阪川柳会　中川滋雀報

感情のむき出し善人かも知れぬ　好一
感情をグラスの水に和まされ　儀一
感情の襞から我慢がこぼれ出る　英子
感情の起伏を画布に埋めてみる　一二三
エネルギーとなる晩年の子が生れ　智子
省エネを地でゆく老母の節くれ手　君子
エネルギー満たん今朝の定期券　頂留子
エネルギー無償の慈悲へ陽は笑う　憲祐
先の先読んで女が老いている　雀踊子
なお残る旅情をくばる土産物　静香
後へはひけぬもうカードはくばられた　善紫
花影の花はひそかに息をする　鬼遊
近道に息弾ませる坂がある　滋雀
息切れへ夫の歩調ゆるくなる　久子
吐く息の白さへ祈る百度石　小雅子
ため息を一つしてから旅に出る　節子

苺熟したかジョギングをはじめよう　度
朝靄をつくジョギングの顔なじみ　柳宏子
腰抜けと云われてもよし悪を逃げ　文秋
モンローの記憶の中の腰の線　酔々

菜の花句会　高杉鬼遊報

咳ばらい二階の生きがい降りてくる　与呂志
やる気ある鴉が高圧線に触れ　小松園
辛口のカレー生きがい思いだす　酔々
履きつぶした靴何足もある刑事　恒明
豪華の死を梟雄として選ぶ　雀踊子
生きがいを金や地位とは別に持ち　幸子
喧しいあれは選挙に出る鴉　鬼遊
生きがいにため遺産でもめさせる　昭子
痛いとこ攻められまいったなと思う　鎮彦
鴉が帰ると哀しくなる枯木　糸葉
刑事の目見てはならないものを見る　柳宏子
生きがいも無いがさりとて死ねもせず　綾珠
町内の鴉となって喪服着る　栞
みそしるがうまい男の朝がある　柳伸
靴の穴そこから刑事の瞳がひかる　幸生
豪華さを競うと空しい風が吹く　度
攻められて居直る女の悪いくせ　頂留子
地獄絵をじっと見詰めている鴉　みずほ
襖絵に灯芯揺れている豪華　弥生
梅雨を待つ傘屋に少し生きがいが　岳人

堺川柳会　河内天笑報

叩くのは今と譲らぬ行動派　佐久良
空缶を蹴った日男負けている　柳伸
空缶の山にモラルが責められる　みずほ
梅雨明けて女の服は透き通り　千万子
原色で濶歩梅雨空胸を張る　一二三

心のカビ干してもみたい梅雨の明け　フミ子
すじ肉と格闘してる妻揚子　天笑
砂浜を素足ゆっくり回復期　清女
れんげ草摘んで可愛いい手にあまり　素灯
茶摘唄富士の麓野の鯉のぼり　逸郎
新茶摘む唄も揃った紺がすり　美乙女
妻揚子出番の多い歯になやみ　ミツエ
大工すぐ他人の家の壁たたく　健司
山の宿素足ひんやりさす廊下　茂美
鼻唄で新聞をよむ妻揚子　雄次郎
責任のない旅に酔う妻揚子　宏子
影武者の不覚はひとつ摘み忘れ　東雲
叩いたらしばらく動く古時計　憲祐
修身の復活思う缶の山　甘平
ママゴトのご馳走に摘むれんげ草　燕子花
叩かれてからの絆がふかくなる　月子
鉄塔がかすんで見える梅雨ぐもり　古葉庵
叩く打つ蹴るでわたしも別れます　千代三

京都塔の会　松川　杜的報

人生の幸せ無二の友があり　弘三
人文字もコンピューターで書く時代　孝江
大原女の一人は柴に花を挿し　笛珠
巨大ビル人ゴミ食って今日も生き　俊三
薄情な人にかげろうもえている　和友
人はどう云おうと身内信じ切り　白渓子
大樹逝き雀の声が聞えない　美穂
あちこちに札所弘法さん偉大　三求
菜の花と蝶々札所の屋根が見え　萬的
集印帖に一つ残っている札所　飛鳥
横綱は構えず弟子へ胸を貸し　佳丹子
横向いて犬人間を無視しとく　紫香
平凡な夫婦で知恵の輪外れない　求芽
根っからの世話好きと云う丸い背　杜的
もてあます時間を埋める舞扇　潮花
家計簿に私の素顔覗かせる　花代子
死んでから捨てよと母は持ちつづけ　芳子
人が人裁く仕組みが恐くなる　水客

岸和田川柳会　植山　武助報

叱るより後のショックの大きすぎ　辰雄
叱ってから後まんまと乗せた口車　加仙
叱る親あってこの身が教えられ　時雄
いたずらっ子母共に泣き叱ってる　波津
鉢植の苺三ツ四ツ赤くなり　民治郎
土地ブーム山里の春鯉のぼり　善
老いへの挑戦パズルクイズをやってみる　富志子
慌て者いつも漫画をこしらえる　さよ子
身に過ぎた幸せだからこわくなり　ひで
あじさいの今日は気ままな色で咲く　春栄
五六日世話になる気の旅仕度　こう
世話好きが今日も写真を持ち歩き　武助
世話やける一人娘が可愛いくて　みずほ
後二日後二日などと借り延ばし　希久志
花道の後姿に見る至芸　白光子
後からまねるつもりの炭坑節　操子

和歌山七面句会　中筋　三幸報

毛虫出て女は若き声を出す　涼子
地蔵尊たしか飲み屋で会った顔　智水廃
根来寺に昔の人を思い出し　啓子
名物の鍋に僧兵かつぎ出し　晃
広き御堂我が家とばかり走る子ら　康男
新聞をまるめてたたく五月蠅　光治
名物にうまいものありくされ鮓　文厚
名物はなにもなし唯紙を漉く　隆恵
眼に泌みて心に泌みて青楓　和美
四百年の重みに生きる小さき餅　五月
包装についだまされる名物か　勇次
宿坊に鏡台があり根来塗　晶子
名物を我が家で食べる味気無さ　フクヨ
名物に駅前という強味あり　三幸

川柳化粧櫓　植村客遊子報

青紫蘇の味さわやかな人と飲む　紅月
禁煙の家が灰皿気がつかず　秋月
消しゴムで消えない過去の傷を持ち　岳詩
父の座が危ふし五体欠け始め　葉香
見晴らしは観音さんの山のぼる　奮水
新築を背に見晴らしをほめており　実男
のれん背に父の意見がきつ過ぎる　越山
手前味噌女が寄れば花が咲き　永楽
都合良い明日の運勢信じとく　大鷹

佳句地10選（前月号から）

津守　柳伸　選

リーダーの重さを汗が知っている　鎮彦
菜の花のふと初恋の日にかえる　文晴
泣く女意地はとっくに捨てている　与呂志
辛抱も妥協の中に入れておく　奮水
ちっぽけな人間にする明日の糧　恒明
ロマンスが欲しくて大正琴買いに　酔々
ひとり言続く回りの鈍い独楽　英詩
人生の裏が乗ってる終電車　与史
行きづまりの地図に人間臭くなる　雀踊子
淋しさは前行く犬の足の裏　薫風

愛憎を秘めて微笑の好敵手　秋　峯
名優も素顔で遊ぶ家庭の日　きよゑ
ママさんが生の笑顔で酌で呉れ　客遊子

南海電鉄川柳会（大阪市）　辻　圭水報

訓示中バタバタたおれる日射病　摩天郎
訓示まだ終らぬうちに事故が起き　圭　水
訓示する方も尻がこそばゆい　小松園
朝会の訓示へ欠伸徹夜組　儀　一
朝礼の訓示世相のおそろしさ　千万子
哀歓を織り交ぜ社長訓示する　いづ枝
二日酔訓示の舌ももつれがち　雅　風
訓示する顔は向いても牌浮ぶ　昌　水
美しい訓示社長は未亡人　東　雲
自衛隊訓示の首相にない威厳　千代三
訓示聞かぬ社員やっぱりやめて行き　綾　女
訓示にもユーモアまじえた入社式　とし子
きく気ない訓示ながながひきのばし　泉　秋
戦前派一にも二にも世間体　信　江
割り切って世間気にせぬ団地族　ミツエ
世間体建前ばかりがまかりとおり　正　流

城北川柳会　川口弘生報

政治家が本気になった叙位叙勲　鬼　遊
三浪目どうやら本気の灯がともる　ふ　み
転勤を仄めかされた四月馬鹿　弘
父さんの禁煙本気で聞いていず　満津子
親も子も本気でむかえる新学期　きくみ
顔色で今度は本気かも知れぬ　千　子
ホステスに本気で惚れて馬鹿をみる　ますえ
受験生本気で神に手を合せ　捷　一
ライバルが出来て本気になった恋　道　子
妻も子も本気の恋にかすみ出し　としよ
いつわりの愛が本気の恋となり　寿　幸
冗談が本気になって新世帯　午　郎
冗談と本気の違い計りかね　茂　樹
口説かれて本気で断る夢の中　左　春
若人の本気をみせる甲子園　星　斗
左遷地が本気にさせた返り咲き　テルミ
四月馬鹿本気を嘘に聞き違え　秀　村
人生の余白物価高に追われ　三十四
雑踏の中で絆の強さ知る　右　近

川柳ささやま　河原みのる報

母の日も母の手を借る車椅子　文　平
母の日こそ感謝を表す母でいる　五　月
母の日に国旗掲げたいほど御恩　百合子
母の日も矢っ張り母は忙しい　ゆきお
兄弟であらそうほどの財もなし　くにの
出世せんとこが兄弟よう似とり　ひか平
金持ちのいぬ兄弟のうまい酒　可　住
クーラーを買ったしわよせ皆で堪え　和　子
新築の娘のしわよせ里へ向く　千代子
国交のしわよせ五輪の華にまで　エキオ
骨折って最後のしわよせ背負わされ　和　人
広場には出せない愛をあたためる　素　水
余生まだ広場で拾う詩嚢もつ　ゆう也
花一つ老の広場で拾ろて来る　宗　珠
大声で広場になやみ聞かせとこ　とみ子

東大阪川柳同好会　三十四報

三ヶ月目やっと我が身になる入歯　弥山人
合掌の指に悟りの血が通い　喜　風
よろこびの電話笑顔が感じられ　喜一郎
優勝の祝辞へ並ぶ美辞麗句　三十四
型だけの祝辞奉書に書かれてる　慶　三
ライバルの祝辞をうける披露宴　美　子
心一つ脱いで祝辞をのべるとす　度
再婚の初老に祝辞などいらぬ　滋　啓
駅弁の釣銭窓についてくる　益　孝
若い子の笑いの渦に釣り込まれ　千代子
印刷屋する程釣り書配ったに　良　京
天職として知る土の暖かさ　右　近
天職へ一度は謀反考える　道　子
世の役に立ってる自負の職に居る　弘　生
手配師の一本釣りに罠がある　湖　風
ジッと眼を見てから押したメクラ判　鎮　彦
事後処理は部下に任せたメクラ判　かずを
めくら判押し使い込みに巻き込まれ　綾　女
天職も努力なければサビて来る　誠　一

勝山双葉川柳会　河野　君子報

乗りこした切符に少し悔がある　花　楢
いつの程鏡忘れて利にさとい　美　代
お芝居のキップは義理で買っただけ　キミエ
年金の入る日はずむものがあり　千世子
希望の灯明日につないで五十年　喜美代
明日は咲く蕾と語るひとりごと　静　子
秘密持つ心に鏡は手厳しい　田鶴子
再会の迷い鏡に聞いて見る　千　里
こだわりを捨てて鏡の顔が映え　芙佐女
飾りつけ鏡上手に活かされる　いくの
気が抜けてはずまぬ毬にも似た思い　智慧子
久方の逢瀬にはずむ同窓会　千　恵
ＯＫをくれぬ鏡に刻迫る　英　子
さば読んだ齢を笑っている鏡　静　香
はずむ日も沈む日もある恋のいろ　久　子
子の明日を教育ママがレール敷き　洋　子

友達が来たのではずんでいるみかん　智子
手毬唄明日は叛くかも知れぬ　君子

川柳しんぐう　川上大輪報

親馬鹿が地獄へ飛ばす車買い　勇太
パパの夢天まで届け肩車　弐
立ち話するにも寡婦の車間距離　里美
車間距離置いて何時でも逢える仲　まさ子
車から春の匂いをさげて降り　与呂志
思慕だけが車椅子から歩きだし　〆女
ドライバー又三角の目でどなる　公子
裏町の暮しを荷車知っている　渓水
父と子が一つになったハーモニカ　大輪
ハーモニカ父の軍歌は負け知らず　富子
鍵っ子が吹けば淋しいハーモニカ　柳志
太陽へ吹く少年のハーモニカ　幸
ハーモニカ合奏ある日の紺絣　としよ
戦線の憩い求めたハーモニカ　武雄
道間えば紀南に四十二号線　十郎
とれとれの鮪が膳に乗る紀南　英子
あちこちの町へ紀南の良さが知れ　冬花
魅せられて再びやってきた紀南　正博
鯨追う海の男は紀南から　三男
口車すらりと降りる齢の功　弘生

川柳後楽（岡山市）　井上柳五郎報

金持の爺さん眼鏡を紐で吊り　幽谷
金持へ魂胆のある顔が寄り　秋月
金持がもっとまけろとまだ値切り　柳五郎
金持てば増えるほどずつ欲が増え　恒洋
巷間で言う程金持貯めてない　博友
影武者が金で政治を振り廻し　元一
政治の谷間で義手がまだ疼く　草風
政治家の手をクレゾールで拭いてやれ　胡風
料亭の密談政治にはねかえり　昌吾
性こりもなく立候補する鉄仮面　梁太
お豆腐が上りましたと物価高　久米雄
鉢巻で立ち向ってる物価高　七面山
物価高歩け歩けの声を張り　照路
贅沢が値を吊り上げる物価高　定平
物価高酒の肴に飲んでいる　正道
小言云うために生れた様な人　たけ志
トゲのある小言へ夜が寝られず　哲郎
退職が近く小言が多くなり　鮫虎狼
いつも聞く小言がないので気にかかり　佐加恵

白百合川柳会（岡山県）嘉数千代香報

響かない太鼓を叩く凡夫婦　真弓
背を向けた靴はニヒルな響きもつ　幸栄
兄は時に響かぬギターかき鳴らす　天流
隣まで配る自慢の茄子の苗　比呂志
昇る陽へ苗一せいに深呼吸　貴枝子
成功の噂が新幹線でくる　勝江
尾やヒレをつけて噂が泳ぎつく　若恵
案じてた噂と別な連開け　哲子
知らぬ間に噂の中の渦にいる　万福人
美人秘書噂の種をいつも持つ　静佳
忘れ物もらいに行って傘忘れ　京太郎
忘れ去るあの戦争を子に語り　柳昇
羽ばたいて欲しいと思う親心　弘子
羽自慢蝶短命を知らず舞う　卓香
折れた羽根癒やす古巣が温したかい　昇山
忘却の旅の夜空で老母を恋う　梨花
探してたメガネ額で畏まり　英子
ある決意喪服の蝶が羽根たたむ　千代香
人情が句集の中に浮ぶ顔　川竹
金策の溜息灰皿知っている　長坊
いつの日か乙女手箱に鍵をかけ　一歩
置いてゆく愛の重さを知らぬ人　十考
二の舞にさせたくはない子を叱る　菊野
年齢を確かめてみる針の穴　節子
長電話コードのよじれ直しつつ　麗子
鉄棒にためす五十のさか上がり　登舟
金出せば何でも買えている平和　つぎお

虹川柳倶楽部　新岡回天子報

噂りに刻々太陽顔を出し　実
母の日に寡婦の涙を誰か知る　勝一
城祭り五月の曳山は子に曳かせ　義美
故郷は菱ヤンヨーの佐賀の町　久仁於
切腹の裃にのし意地でかけ　四郎
自適の身次から次に幸不幸　素石
塩辛の味を入歯がかみしめる　芋助
身障者車椅子にも有る笑顔　掬治
又やった我田引水落し水　虹汀
長談議もうやめないか陽はかんかん　回天子

川柳ウイロー社　前山北海報

誘惑に打ち勝った今日の空の色　暁舟

川柳高知

YFC会員募集・初心者歓迎

▼本年二月から梅田阪急ファイブ八階・オレンジルームで開らかれている川柳セミナー、「生々庵川柳行脚」の会員を募集している。会費千円。毎月第三火曜日の午後一時半から三時半まで。初心者をおすすめください。

誘惑の巨利ことわる勇気出し　北海歌子
誘惑の罠とは知らず美酒に酔い　カロ女
誘惑の隙を与えてされたと言い　万里歩
花の町誘惑ネオンがまねいてる　秀山
負けても見たいあの微笑みの誘惑に　雪女
誘惑にまけて抱いてる混血児　公女
誘惑の二字を忘るなと娘を諭し　三石
誘惑にのらず女はにくみ出し　梨花
もう一ぱいその誘惑に我勝てず　黄塵
誘惑に負けずにやれと餞に　昭子
狼と知らずに乗った魔の車　拝山
誘惑はあなたまかせとネオンの火　紅渓
禁煙が又誘惑で吸い始め　草海
誘惑もふんわり受けて世を過し　蒼生
ひま人が海老で誘惑鯛を釣り　風影
誘惑の義理につられて重い足　潔

吟分　西尾栞

歴史の散歩道にて
人加　帝国座跡やっと見つけたビル谷間
同追　帝国座オッペケペなら知っている
　　日曜の適塾裏まで廻って見

駒つなぎ川柳会（大阪市）　里

腕白の名残りの傷は明るくて　小路報
秀才は冬の世界に閉じこもる　柳宏子
経理課で今日も残っている不気味　恒明
気の弱い男で定価通り買い　弥生
金釘流で足りてる定価表　みずほ
定価表けちな男は嫌われる　酔々
定価では買わない主義も浪速っ子　雀踊子
時価とあるだけ定価表ない呑み屋　多津緒
デパートの定価は高い声を出す　雅風
百貨店定価で買った犬吠えもせず　悟郎
化粧品ビンの出来から定価でる　柳杣
何回も定価貼り変え売れ残り　美乙女
赤札が定価のような顔ならべ　茂子
筆太な秋刀魚の定価水にぬれ　善信
宝石の定価は見てるだけの縁　宏子
定価の裏側に符ちょうが書いてある　鎮彦
定価表観音様が目をつむる　美代
たたいたらそこは何とかなる定価　小路
住む世界違うと定価表の雫が云う　凡九郎
定価表の通りに善人よう売らず　小松園

★

▼本田恵二朗氏から—

日川協大会の文部大臣賞の選考委員（岡山県代表）に指名されまして、その選考に参加しました。

また、私が日米交歓川柳大会に選者として参加した時以来懇意のポートランドばら吟社主宰の斉藤竜子さんの歓迎夕食会を催した。

雅号ぶっちゃけばなし（190）

ゆうか　たかはし　高橋夕花

生まれた日が、奇しくも路郎先生のご命日の七月七日。そうなのです。七夕の宵が私の誕生日でございます。あれは四十九年春、はじめて出席しました本社句会の帰り、菜の花のみなさまご同席の中で、栞先生から、夕花を頂だい致しました。何よりも花が好きな私は、この二字をありがたく嬉しく心から大切にしています。もう褪せてしまった花ですが、永久に七夕の夢を見つづけることでしょう。しかし、今もって雅号に追いつけぬ作句の苦しみを抱いております。みなさま、これからもよろしくご指導下さいませ。

（主婦）

本社八月句会

日時　八月七日（木）午後六時
会場　金属会館
南区鰻谷東之町10番地
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
電話　271・3935番
柳話　野村太茂津
兼題　「謎」「箱」「青」「各駅停車」
（今月の出題・香川酔々）
席題　二題　当日発表　各題三句以内厳守
会費　三百円
★投句だけの方は切手百円封入

香川酔々選
児島与呂志選
若柳潮花選
西尾栞選

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

9月の兼題　「信心」「棚」「前座」「反撥」

次回句会・9月8日 6時から

暑中お見舞い申しあげます

川柳塔社　常任理事　一同
同　参事　一同
同　理事　一同
同　運営部　一同
同　句会部　一同
同　編集部　一同

募集

十月号発表（8月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「みやげ物」西川善紫選
「癖」山川阿茶選
「一泊二日」石川侃流洞選

十一月号発表（9月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「思い出」佐伯越子選
「浮き沈み」神田秀峰選
「起きる」河村日満選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。
★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

8月の常任理事会は4日 5時から

定価　四百円（送料29円）
半年分　二千五百円（送料共）
一年分　四千八百円（送料共）
昭和五十五年七月二十五日印刷
昭和五十五年八月一日発行
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
〒542
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
発行所　川柳塔社
電話　大阪・二七一―三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番
普通預金口座番号・一〇二七八三

肉体疲労時のVB1補給に——
アリナミンA
アリナミンA25の効能＝肉体疲労時・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB1補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、強壮。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。
武田薬品工業株式会社　〒541 大阪市東区道修町2-27
タケダ

・ペンペン草・

暑中お見舞い申しあげます。

夏休み

★大・高・中・小・幼。五階級のお子さんを持つ家庭がある。ご主人の給料運びも大変だが、奥さんがこれまた大変なことである。食事の用意と洗たくの毎日だそうな。世の中にはこんな夏休み？もある。

★ぼくのような仕事をしている者には、夏休みなど夢のような話だが、最近のように体調をくずしていると、二、三日でよいから夏休みのマネごとでもしてみたくなる。

★土・日曜日は毎月、割りつけと校正に追われる。最後の土・日はどうかすると休めることもあるが、しかし、大抵の場合、月曜日に送本というケースが多い。だからよその川柳大会や旅行など出かけたことがない。たまには高松にいる孫とも会いたいが、なぜ、土・日にこだわるのかと思う人もいるだろうが、土・日には仕事をしておいて、印刷所の休み明けに手待ちをさせないためなのだ。原稿の手持ちと編集担当者—やった者でないと分からない話だ。一日も早く本の顔を見たいこの気持ち、分かってもらえますかナ。

★昨夏あたりから体調を少しくずしているので無理をせぬようにしているが、そんなとき菓子さんが救急車で入院した。びっくりしたというより万事休すと観念さえしたことであった。だがすぐ退院の朗報に接した。どうやらぼくの〝編集寿命〟も延びたようである。

★若本多久志氏（私信）—私にも覚えがありますが一過性の発作でも「今にも死ぬのでは？」と思うくらいの苦しさです。どうぞ貴兄も無理をしないよう、発刊が二、三日遅れたからといって死罪にもなりません。「自分が一番大事」という行動を念じます。百薬にもまさるお言葉に胸がつまった。

★各地から糖尿に関する書籍やパンフレット、煎じ薬ほか、いろんなたべもの、ご自身の体験を書き送ってくださる。ありがたいことである。今まで医師の門をくぐったことがないだけに、どうも療法下手が目立つようである。

★最近、柳界を代表する健筆家二氏からおたよりをいただいた。奇しくも二氏の末尾に、川柳に情熱を失しなったと書いておられた。「川柳ってなにだったのか？」というような意味に解したが、川柳を遊びと考えれば、こんなに追いつめられた気持ちにはならないのだろうが—。はたらき甲斐のある川柳界に早く成長してほしいものである。

（不二田一三夫）

情熱

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和五十五年七月二十五日印刷
昭和五十五年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻六三九号　川柳塔　八月号

暑中お見舞申し上げます

電波新聞社

東京本社
東京都品川区五反田一丁目一一一五
大阪本社
大阪市北区中ノ島三一三（朝日新聞ビル内）

投稿欄案内

川柳　選者　橋高薫風
（掲載日）毎週水・土曜日

俳句　選者　小寺正三
（掲載日）毎週火・金曜日

短歌　選者　佐々木信夫
（掲載日）毎週月・木曜日

※優秀句には掲載紙をお送り致します。

〈投稿規定〉はがき一枚に三句（首）以内・自由課題。
〈投稿先〉〒530 大阪市北区中ノ島三―三（朝日新聞ビル内）電波新聞大阪本社学芸部あて。
（川柳・俳句・短歌を明示）

つめたさに、おいしさをそえて……

アイスキャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイン

高島屋　そごう　松坂屋　阪神　ドージマ店
近鉄（アベノ・上六・奈良・東大阪各店）
京阪モール　なんば新川店　虹のまち鹿鳴
中之島サン・ストア　淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店

551 HORAI
大阪・なんば
蓬莱
TEL (641) 0551

定価　四百円
（送料・本号に限り三十三円）